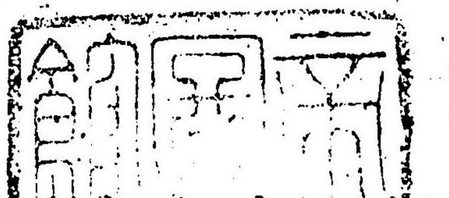
特 8
46



凡事業を興し名を揚るには必ず種々の障害ありといへども能く百難を排し屈せず撓まず一意相徹せずんは精神一到決して成らざる事あし況んや一國を開き百万の民を風靡せしむるに於てや或ハ其身を危くし又も怨恨を受け險を冒し難を避け以て漸くこを爲す其の辛勞尤幾干ならんや彼の長曾我部元親の如きは身ハ土佐の一隅に鄉士たりしも誠意以て國に尽し邪を仆し正を興し終に四國を併呑するに至りたり其の辛苦たる一朝一夕の事にあらず既にして元親四國に主たりてより後の事歴を載するもの多々ありといへども之を領するに至れる

まで三好を倒し細川を亡ぼすの間計に勇に其の力を振るたる顚末を記するもの未だ曾てあらざるを以て茲に其の事歴を講談速記し梓に上すこれ啻々長夜のお伽草たるに留まらずして少年諸子が修身の一助ともなりぬん

發兌主に代りて

竹蔭居士識

特8
46

長曾我部武勇傳

長曾我部武勇傳

田邊大龍講演
今村次郎速記

第一膳

扨て今日より辨じ上げまする、四國の名家長曾我部元親氏親子三代遺ばれ覇王無二の豪傑といふは人口に膾炙するところでございますが既の四國と申せば曾ふまでもなく、阿波土佐伊豫讃岐等に結搦み國でございまして足利盛への頃はひに管領細川御兩家で是れを守護いたされた位めでございますから餘程重きを置かれたと見えまして、既に近來に至つても此の四國よりして朝野の間に有名の方々も澤山に出でられました、之れ即ち國風の然らしむるところでもございませうが、應仁以來の大亂を押し鎮め四國

一統を領したる長曾我部の祖先といふものは、餘程舊家にいたして、聖德太子に事へ奉つりたる秦川勝是れは佛敵守屋大臣を御誅伐になる節莫大なる勳功がございましたが更らに名譽を好ます我が日本の中に於て、心に叶ひしとゐろは四國であるといつて、土佐國へ移住いたし、代々曾我部といふとゐろに居りましたが、子孫元明といふもの、天晴の豪傑にて、常に言へらく我れ何ぞ區々として當所に於て足れりとせんや、勿体なくも上は一天万乘の君の宸襟を安んじ奉つり、下萬民塗炭の苦しみを救ひ、間宜くば日本六十餘州に蔓こる賊を切り從がへ、帝都に旅を繕がへし、飽くまで皇室を守護いたし奉つり、武家の長にもおらんとて、曾我部といふ文字の上に一字を加へ、長曾我部と名乘られました然るところ其の志しを貫ぬく能はずして、子孫の孫左衛門元親の代に臣り、僅かに曾我部の豪民とおつて居りまする内に、茲に四國を切り從がへた

る孫太郎盛親といふ豪傑が出でました、虎は生れて三日にして牛を敎すの兆あり、孫太郎盛親幼年より遊ぶときも他の小兒とは異なり、山野を奔走なし自から大將の如き擧動をいたしまた、或るときは裸馬に打ち乘り、我が意に從がふものは己れが食すべきものをも與へ、我れに從がはざるものは飽くまで是を取つて押へ、降參をいたさねば止まぬといふ位ゐの氣性でございました、成長するに從がひ文武兩道の修行をいたし、一を聞いて十を悟るの才あり殊更慈悲深く、近鄕近在のもの三四人と集まれば　甲「オイ多十さん、マア聽ろいたぢやアねへか、孫左衛門處の孫太郎には　乙「さうよ那れはまた剛ひものだ、俺が家の野郎あぞは甚く打ちめられて居て俺がいふよりは孫太郎どんのいふことの方を能く聞くといふなア不思議あるものだ　甲「イヤ何處の子供でも孫太郎どんには怖れて居る、第一力のあることと慈ろいたものだ、此の間も見て居た

ら俺達が二人三人掛つてさへ骨の折れやうといふ大きな石を一人で轉がし、て道の低くおつて居る處を直したがな　乙「ウム那の道の惡いところを直したのは孫太郎か　甲「夫れになア、俺が乘つたッて中々乘り越せねへ處の、喜衛門どんの那のヂャ〳〵馬を乘りこなした、何てエマア剛エものだらう　乙「さうさなア　甲「それにアノ俺達にも碌々讀めねへ位ゐの眞四角に書いてある木をスラ〳〵讀んで聞かして呉れる　乙「マア大くあつたらどんな剛エものになるだらう」と嘆をいたす位ゐ、孫左衛門も殊の外喜こんで悴へ對して一層物を仕込しんで居りまするが其の上兩親に對し殊の外孝行で何處といつて申分もございません

第二席

然るに其頃はひ土佐の領主と申しまするは、別段に剛ひ人もおく動もすれば內亂止む時なく、領民共に於ても枕を高くして眠ること叶はぬ、岡波には細川治之伊豫には河野道宣、是等の人を初め少しく力ある者は互ひに其の望みを懷いて居りまする、然るに孫太郎これを見聞いたし民の憂ひを除かんと存じ自から諸所方々を走あし人民を說得いたし有力ある人を迎へ何卒一刻も早く鎭靜をいたさんと苦心をいたしたる末京都より一條房家卿を迎へ奉つりこの公卿衆の力を以て治めて貰はんといたしました固より四國の人の勤王の志ざし厚きことは前にも演べたる通りあれば朝命を奉じて人民撫育のために下されたる一條家へ對しては一人とあつて命令に從はざるものもなく多くの人々も一時安心をいたしましたが其の勢いに乘じてゐの一條家の執權栗塚主膳淺山藏人の兩人專ぱら私慾增長して人民へ對し年貢を取上げ用金を申附け萬一これを違背いたさば引押へて牢獄に下し或ひは苛酷の處刑を行なひうの心虎狼に如しき有樣此の時盛親天を仰

いで歎息なしゝ、我れ過まれり、勿体なくも天朝の命を奉じ一條家を御遣はしになりしも栗塚秋山の兩人飽まで民を苦しむるがゆゑ今更に至り何ぞ人々に對し我々親子面を會すべきやうもなし病ひを癒さんといたして良樂を求め良樂變じて命を損ぜ定めし人々は我々を陰にて誹訪いたす事おらん此上からは何ぞ人を頼まん我れ不肖おがら身命を抛ちその害を除かん、揮ふべきは今おり獨いたすの場合にあらずと茲に怒まち決心をいたし父元親と共に志さしあるべき人を密かに尋ねて居ると山名浪人吉良播磨、久武宮内おといへる風竟の豪傑、長曾我部親子に同意おし、栗塚秋山の兩人を手初めに打つて落さんと夫々用意いたして居りまする處、先方は一條家の執權として連れざる時も百騎二百騎、多く連れたる時には五百八百人の勢を從がへ威風凜々四邊を拂ひ專ぱら油斷おく路次殿重にいたして歩くに依り如何に豪傑なりと

雖ども元親等四人にては手を出そことも叶はず、涙を呑み腕を擦り時の至るを待つて居りまする、時も永祿四年八月十五日淺山藏人の方にては月見の宴を催ほし栗塚主膳を初め日頃己れ等の麾の麾を拂う侠人共を集め傍はらには美女を侍らし、酒池肉林とは斯ることを申すべきか、所狹までにさま〳〵の酒肴を並べ立て詩を賦し、歌を詠み、踊りつ舞つ酒宴に及び何れも十二分の醉を發し主從の區別も別たず起きも上らざる有樣、蹌々樣子を尾迫ひたる元親初め四人の者此の時おりと密かに庭前より忍び入り結搦おる間毎〳〵を通り抜け掛隣れたる奥二階、昇る楷子の十一段音せぬやうに密かに窺がひ居るとも知らず　廣「イヤ栗塚氏、何と好い月ではござらぬか　主「如何樣十五夜十三夜なといふものは兎角雲めが邪魔をして往かんものであるが今宵の如く斯樣に晴れるといふは珍らしきことでござる……」

第三席

藏「時に晴れるといへば晴れていたもるまでは無か、彼の長曾我部の元親親子、近頃聞けば何とおく浪人を語らい我々二人を狙つて居るといふ噂を聞いたが奇怪お奴ではござらんか　主「アハヽヽ、如何にも左樣の噂を承まはつたが高の知れたる愚民輩我々に指だに差れる氣遣ひない、何と皆々其方等も左樣な噂を聞いたか　○「如何にも承まはつてござる、其上彼等は百姓をば說歩き、屢々怪しからぬ擧動をいたすといふことでございます、併し御重役樣方に何で手などが附けられるものではございません　藏「ウム若しも怪きものあらば用捨なく捕取り充分に苛責を加へ夫にても往生を遂げざれば毒藥を用ひて害して終へ　○「委細承知いたしました　△「唯今山崎の申を通り我々共粉骨碎身をいたし、邪魔者を拂ひまもるやう仕つりまもる　藏「コレ〳〵左樣な事は慥りに

口外をいたさぬが宜い、斯る話しをいたしたのが世間に知れるやうな事があつては他國と違い、此の國には至て義の堅い奴が多いから長曾我部に與いたすといふものもあらん、萬事事を行おうまで寢言にも決していふてはあらんぞ　山「お言葉ではございまもるが只今各々方の御威光に對し彼等爭でか敵對いたすとの出來べき若し各々等に敵對う者あらば我々共速やかに誅戮いたして御覽に入れまする　藏「ウム慥しい其方等の心得我々年來の志ざし成就いたさば充分に恩賞を取らせる、必ずや油斷いたさず長曾我部親子を押片附けて終へ　山「承知いたしました、彼等が諸方を說歩き貴郎方を惑口いたす此の一ケ條を以つても上を蔑しろにいたし國民を騷がせるの廉を以つて明日にも彼等を召捕るの手配りを仕つります　藏「夫は感心、併し彼等も中々に腕前勝れて居るゆえ若し手に餘らば飛道具に掛けて討つても差支ない　山「承知

いたしました、イヤさういふ事とも知らぬ彼等は今晩大方月見の眞似でもいたして居りませうが馬鹿な奴等でござる、斯るともあらうと思ひ御前方へ從がうやうにと存して手前實は元親へ對して悟してやつた事もございません、併し彼等眼寃にして從がいもいたさず終に命を失あうとは馬鹿はゞ世の中に不便のものはござらん　藏「アヽ左樣か、ういふことを承まはれば愈よ以つて明日は首尾能く事をいたそやうに　山「ハイ早速出張をいたし彼等を召捕るでござると其の言葉未だ終らざる內にズカ〳〵と進んで參つた以上四人、先に立つたる一人が天地に響く大音を揚げ、元「汝等奸賊大惡を巧みあらざる我々四人を討取らんとは偖く き處の致し方汝等が出張に及ばゞ我々來つて天に代つて誅戮をいたそ、首を伸して我が一刀を受けよ　藏「ヤア、さういふ汝は……元「オヽ長曾我部元親嫡男孫太郎盛親、吉筒播磨、久武宮內、國民のた

めに此所に來つて天罰を加へる覺悟をしろ」といひながら四人均しく腰に帶びたる大刀を拔く手も見せず切込んだり

第四席

惡盛んある時は天に克ち天定つて人に勝つ、古にの聖賢も說かれたる如く栗塚、淺山の兩人主人を裏しろにいたし私慾增長し國政を恣まゝにいたさんと同士の輩を集め惡計を企て國を憂うる勇士長曾我部親子を密かに討たんと計畧を廻らして居る折しも思ひ寄らざる所の四人が切込んで參りましたるに依つて暫時は呆氣に取られて居たるが固より大膽なる兩人、怒れる眼に朱を注ぎ藏「扨も汝等深夜に至り我が屋敷に忍び入りしは奇怪の擧動、ソレ各々彼等を早く討止めよ」と指圖に依つて心得たりと山崎初め一統が蹌踉く足を踏めて立上りしが固より酒宴の席上であるから次の間に刀を置き脇差ばかり帶して居り各々柄に手を掛けて

扨放たんとする間もなく宛然虎の暴れたる如く四人の豪傑東西南北より切つて落し混々と迸しる血汐は疊の上に流れ宛然周防の梅を明けたるが如く其の間に栗塚淺山の兩人、早くも身支度をいたし各々大刀の鞘を拂ひ、元親を臨んで左右より　藏「如何に匹夫、眞の武士の腕前見せ呉れん、覺悟いたせ」と切込むを元親ヒラリと跡に退りカラ〳〵と打笑ひ　元「小賢しき汝等の一言眞の武士とは我々の事なり、イデや腕前の程を見せ呉れんず」と血に染む一刀を取直して二人を對手に上段下段、火花を散し鎬を削り、千變萬化の秘術を盡し立合つて居る内に横合より盛親大音を上げ　盛「如何に父上此奴は我等が引受けて候あり御引候らへ」と是亦尖先より血の滴たる一刀を取直し、淺山を臨んで切込んだり、藏人跡に飛退り　藏「若年者の分際として我れに刃向ふは嗚呼がましや、イデ我が手並のほどを見せ呉れん」といはせも果てず盛親が切込んで來る一刀の凄まじさ、藏人は若年と侮りし所思ひの外なる盛親の尖先のために切立てられ左の小額へ一ケ所右の腕へ一ケ所二ケ所の傷を蒙むり、受太刀にあつたる横合より吉良播磨乘込みの首を討つかと思ひの外背を返して健かに小手を打つたるゆゑにガラリ眞劍を投落す、這は殘念と脇差の柄に手を掛けんとする處を矢庭に踏込む盛親が一刀を夫に投出しムンッとばかり引組んだり、藏人も固より大力のものゆゑエイヤッと聲を上げ暫時の間揉合つて居る内に吉良播磨、近附き來つて盛親に助勢をおしゐたちの間其の處へ捻伏せ豫て用意の早縄を取つて縛めたり此方は栗塚、元親を對手に打合つて居ましたが是亦三ケ所はどの手傷を蒙むり太刀先乱れたる時久武宮内乘込み來り　宮「如何に元親殿、我れ御助勢を仕つらん元親カラ〳〵と笑ひ　元「忝しけなく

は候得共何ぞ鼠輩一人を對手に勝負いたすに貴殿の力を假るに及ばぬ家内の者の騒ぐをば御取静め下さるやう　宮「委細心得たり」と梯子を下つて參りしに下に居つたる家來共は樓上の騒ぎに大いに驚ろき弓よ太刀よと、上を下への混雜をいたして居りましたる處へ久武宮内血に染む一刀を取つて下り來りたる樣子を見て大ひに驚ろき八方へ散乱いたす

第五席

其の内兩三人の者殊勝にも槍を押取り打向ひ　○「如何に夫なる者深夜に至り白刃を持つて忍び入りしは强盜の所爲と相見えたり我々共斯く抑へたる上からは一品たりとも渡す譯には相成らん此の槍先を以つて往生させんと近附き來るを久武宮内　宮「何を汝等が小癪千萬國を憂ふる武士に向つて强盜あとゝは奇怪の言葉」といふより早く踏込んで兩人を左右に切つて落す其の勢ひは

ひの凄まじさに今一人來りしものも肝を消し逃げんとするを踏込んで足を上げて健たかに腰を蹴たればパッタリ夫に倒れたり其の者は驚を慄はし　△「何卒我等の一命を許し玉へ其の代り後日如何樣な事ありと雖ども各々方の御たゆと計る主人の悪事は拙者心得て居るものにて候　宮「ウムヤテ又汝は何者なるぞ　△「然れば淺山藏人の家來大川傳内と申する者拙者の一命を御助け下されば是までいたせし主人の行なひ、一點も包まず申述べ飽まで証人と相成り申す」宮内大口を開ひて打笑ひ　宮「扨も頼母しからざる家來もあるものかな去りながら我々には屈竟の証人如何にも汝の一命は助け遣はすに依つて只今の一言を忘るゝなよ　悠「有難き仕合せに存じますと、宮内は忽ち傳内といへの者をば傍の柱に括り附ける話變つて元親は栗塚を對手にいたして勝負せしが踏込んで栗塚の一刀を打落し忽ち取つて押へ是亦縄

を掛ける　盛「父上」　元「オヽ盛親であるか　盛「斯の如く兩人の者を生捕りいたせし上は直ちに國司へ對して言上をいたし處刑は上の思召しに御任せ申さん　元「イヤ尤どもの至である　盛「初めて某かし引組んで生捕らんといたしたる處へ吉良氏お出でに相成り夫ゆゑ難かく斯の如く藏人を生捕にいたしてござる　元「左樣であるか申合したる譯にはあらずと雖ども播磨殿は僕と同じ心と相見えたり　播「如何にも左樣にござる、シテ貴殿の御言葉に依つて下へ參りし久武氏は如何いたして候か　元「然らば未だに歸らん所を見れば家内のもの久武氏に對し及ひいたせしも計り知れず、盛親汝參つて樣子を見屆けて來れ　盛「心得て候と盛親樣子を下つて參らんといたせし時に　宮「アイヤお出でに及ばず、宮内夫へ推參を仕つるといひつゝ夫へ來りし宮内　宮「元親殿を初め御子息並びに播磨殿も一ケ所の手傷も負ひ玉はゞ大慶の至り

にござる　元「是は〳〵久武氏幸ひにして我等親子播磨殿も手傷を蒙むらず、貴所は如何いたして候らはんと心得居りしが、慥かな躰を見て大慶に存ぜる、シテ彼等が家來共は如何がいたせしか　宮「然れば兩三人の者逃げる中より引返し、打向ふをば忽ち兩人切つて落し、今一人を生捕にいたしてござる　元「ウム夫は幸ひシテ其奴は如何いたしてござる　宮「扨も頼母しからざる奴輩のみ揃つて居り大川傳内といへるもの、主人の惡事は殘らず抽者存じて居るゆゑ、命だけを助けて呉れなば、今までの惡事の頭末何れ如何ある所へ參つても、充分に述べ立てんと申するに依つて生捕にいたし置きました　元「左樣でござるか、斯く屈覓なる証人を得たるは此方の幸ひと話しを聞いて主膳藏人の兩人は扨は傳内奴が右樣なる事を申せしかと呆氣に取られ茫然として居りましたし

第六席

夫より四名の豪傑手別をいたし、家内の者を取調べるに妻子は何れへか逃延びたるものと見れば、更らに姿も見へず、これに依つて藏人主膳傳内の三人を引立つて引取らんとおしたる處へ俄かに聞ゆる敵の聲貝鉦太鼓を乱拍子に打鳴し、聲々と押寄せ來りし人數は大凡二三百人、提灯松火を振立て、先に進みし一人は黒糸の腹巻を着し桃實割の兜を頂だき、小手脛當も美々しくして、黒毛の駒に打跨がり、大太刀を脊負ひ、二間柄の鎗を押取り、馬上豊かに乘り出し大音聲に呼はつたるは

武　汝等奸賊、當所を何方と相心得る勿体おくも一條房家公の御領地なるぞ、其上執權職たる淺山藏人の屋敷を騒がし狼藉の擧動、訴へ出てたる者あるに依つて、鎮定のために向ひしは山川修理と申する者にて候、叶はぬ場合と心得得尋常に縄に附け、左おき折には我が鎗先を以つて討取り呉れん」と

いふより早く、鎗に扱きを入れたことにして、既に先に進みし元親を臨んで突掛らんとなしたるに、承まはつたる元親が、怒れる怜の盛親を側し、太刀投捨て其所へドッカと座し　元是れは御重役山川氏にて候か、拙者儀は曾我部の住人長曾我部孫左衛門元親と申する者は是れある少年は愚息盛親、跡に扣へし、兩人は、親友吉良播磨久武宮内と申する者、執權淺山氏の邸宅を騒がしたる段、甚ばゞ恐れ入ると雖ども是には深き仔細有之、決して我々が狼籍乱暴をいたせしにあらず、宜しく手前共申上げる事を御聞取の程願ひ奉つる　修「言ふお曲者、汝辨を飾り、我々を欺むかんとするは奇怪なり何ぞ其の侯辯に欺むかんや、尋常に縄に掛れ、ヤア〳〵　家來共縄打てッ」といふ指圖に、心得たりと健男の武士鎗先を揃へてアハヤ突掛らんとなしたり、先刻より耐へ耐へし盛親は、怒れる雨眼明星の如く　盛「斯の如く父上が、得物を捨て申上げるも御聞入あらざ

れば己むを得ども、盛親御對手にあり申さん、高の知れたるコケ武士何條何程の事やあるべき、父上其所退き玉へ」と腰に帶びたる大刀の鯉口を寛ろげ躍り出でんとなしたる時に、櫓を搦んで二足三足タヂ〳〵と引返し　元「如何に盛親、汝怒れるは尤ともながら、浸りに役人に對し刀向ふへからず、我れ〳〵四名打揃ひ御領主に目通りをいたし、委細言上を仕つり、夫にては御聞入れざれば夫までの事」と留むるを振拂ひ　盛「仰せには候得共、斯の如く先方より、暴を以つて來る上は暴を以つて防ぐは己むを得ざる場合に候」と息巻荒く立上るを、すさり居らう盛親汝若年の分といたし、斯くいふ父の申せる事を聞入れざるか……アイヤ山川氏、決して御手向ひをいたすにあらず、宜しく君の御前へ對し、我々を誘かひ玉へ、一伍一什を言上仕つる上は、善惡邪正も相解り申さんと飽まで穏やかに述ぶると雖ども更に聞入れず　盛「汝卑怯なり、尚も侯辯を揮つて

我々を欺むかんとなすか、最早猶豫いたす場合にあらず、覺悟に及べ」と鎗を捻つて山川が激しく突掛つて來たると、流石温順の元親も大きに怒り　元「斯ばかり申上げ、くも御聞入れにあらざれば是非に及ばず」と前に置いたる一刀を取り、スックとばかり立上り、客らは切らんと身構へに及んだり、初めの一言に似もやらず山川の組下の者、其の勢はひに恐れ、暫し猶豫をいたしてをりました

第七席

元親親子の勇氣に恐れて一同は如何になさんと、組頭山川の樣子を見て居りまする修理は大勢の前を憚かり、其儘手を束ねて引取る譯にもあらず、去りとて僅か四人とは云ひながら、先方の勢はひ凄まじく、其上執權兩人は既に生捕に相成つたる樣子、懇じいに手出しをいたせば、執・權の身の上にも拘はらんと思ひ、猶豫いたして居りまする折しも、遙か彼方より砂煙りを蹴立て、ハヨウ〳〵

と馬を飛して乗込み來る一人の武士、大音に呼はつたるは　武「ヤ
ー〳〵山川君命に候なり、靜まり玉へ」といふより早く乘着けたる
は、何者あらんと見てあれば、主人房家公の御意に入の臣金子孫三
郎といふ者　修「ハッ　孫「君命に候ぞ各々靜まり玉へ」と呼はれば
元親初め四人の者各々大刀を前に差出し、ハッと両手を事へる、此
の時孫三郎一同をシロリと見て　孫「如何に山川、今宵淡山の邸宅
に容易ならざる騒動ありし趣むきを承はり、君御病中とはいひ
ながら殊の外の御心痛、如何ある者が右様な事をいたせしかと、夫
々相尋ねんと心得し時に、曾我部の農民一同に打揃ひ、夜中とは申
しながら、御願ひの候ありと、我等方へ訴へ來りしにより、直ちに面
會をいたし、事情相尋ね候處一篇の書狀差出したるに依り、是れを
見れば執權兩人積年の惡事の顛末一々証據を上げ、明瞭に認ため
たる物なるによつて某がし、君へ面上をいたし即ち御命を蒙む

つて推參いたしたり、貴殿は又何等の爲めに斯の如き大勢を引具
して參られたるや　修「然れば、拙者方へ對し、藏人方よりの訴たへ
で只今聚塚主膳來り酒宴眞最中の處へ、乱暴にも四人の曲者踏込
み忽まゝに白刀を振廻し、一大事に及び候に依り、速やかに出張を
願うとの趣むきを注進に及びしに依り、上へ伺がうの暇もなく一
存を以つて出張をいたし候　孫「ウム如何に其方が何者あるか
元「ハラ手前儀は曾我部の住人長曾我部孫左衛門元親といへる者
是あるは悴盛親同志の武士吉良播磨久武宮内と申せる者　孫「ウ
ム、シテ藏人主膳等は惡事を働らきし赴きあるが左様なる事をば
何故上へは訴たへ出でざるや　元「恐れあがら是には深き仔細あ
れども道路に於ては陳じ兼ね候、仰ぎ願はくば御領主御前に於て
一切首上仕つりたく、宜しく御計らひ下さるやう、我々は決して各
々様方へ對して「乱暴はいたし申さず、証據として是なる得物は御

渡し申す」と各々大小を前に差置き、穏やかに扣へて居りまする孫三郎熟々先刻よりの様子を見てあれば、言語といひ挙動と申し、由緒ある者と見えまする　孫「ウム如何にも神妙の致し方、何は然れ速やかに我々と同道をして参るやうに　慶「アイヤ孫三郎殿であるしか、淺山栗塚是にあり我々の縄解いて賜はれ、尚は此奴勞の辨に惑はされ、油斷致し玉ふな　孫「オヽ淺山栗塚の両名、各々に於ても手前と共に御領主の前へ罷り出でるやうに……ソレ縄解け」と指図に依つて、山川の紐下、近附いて縄を解かんといたしまするを久武宮内進み出でゝ　宮「アイヤ暫らく、我々斯く苦心いたして折角に生捕し悪人を漫りに縄を解き玉ふは、虎を竹林に追込むが如く、危き事に候、先づ〳〵一通りお尋ねになつて、縄を解いて然るべし……

孫「イヤいはるゝまでもなく一應尤とものの至りなるが、決して心配をいたすに及ばん、我々引き受け申すであらうと孫三郎は両人の縄を解かしめ、一同のもの周囲を圍ゐ元親等四人を初め、主膳藏人両人をも引立つて参る内に夜もホノ〳〵と明渡りました先づ一同のものに夫々手當をいたし、五ツ半頃はひに相成り双方お召といふことにある、房家卿御病中あがら自から取調べをいたしとおつて御様間近にお進みに相成り、元親等四人を庭前に莚を敷其上に、着座をいたさせ、両人の縛は御様側のとゝろに扣えて居りまそ孫三郎殿へ進み出で　孫「恐れながら申し上げます、是れなる四人のものの是々のものにて候」と委細を言上いたしました、君は是れを聞き給ひ　房「如何に元親とは其の方あるか、予は房家であるぞよ見知り給ひ　元「ハヽッ、恐れながら傍はらまで言上奉つり候、僕が賤身賤の身を以つて、御領主様に御目通り仰せ附けられ、剩さへ

御病中と知りながら御自分にお調べを蒙むるとは、身に取つて如何ばかりか有難き仕合せに存じ奉つる、宜しく御前へ御挨拶の儀を願ひまする房「家卿御自身に　房「其の方どもに相尋ねるは餘の儀にあらず、予が執權職たる淺山栗塚の兩人私慾に耽り民を苦しめるとあつて、汝等手を下し生捕りにいたし候趣き、穏やかならざる擧動、如何ある存じ寄りあるか其のところに於て申し述へよ

元「ハヽッ謹しんで言上し奉つる固より身賤なる我々、申し上げ候事も前後に相成御、病中を煩はし奉つるも恐れ多きことなれば、勉くば料紙硯を拜借いたして、一通り認ためお覽に入れ奉つる　房「成るほど尤ともの至りである、予も病中ゆゑ、永く是れにも堪へ兼ぬれば書面に認ためて差し出すこと宜しかちんと早速小姓に申し附け料紙硯を拜借仰せ附けられました元親を執つて直ちに認ためたるを、孫三郎に對して恐る〳〵差出せば、孫三郎より房家卿

へ御覽に入れたるところ、手蹟も美事あり其の上文章もつゝましやかにして執權兩名の惡事、一々非を擧げ、例を引き、更らに餘もとゝろもおし、暫らく御覽に相成つて居られしが、ハラ〳〵と落涙をいたし　房「さても頼母しからぬ世中に頼母しきは汝等四人、斯くまで苦心をいたし、予が汚名を雪がしたるか、夫れに引替え怪しきは栗塚淺山、コレ孫三郎、兩人のものに縄打ッ」といふ指圖承まはつた る兩人大ひに驚ろき　藏「アイヤ暫らく、御前、我々兩人如何ある罪もおきに縄打、てとの上意は甚だ以つて心得がたく、此奴等四人の申すゝとを、眞のことゝお聞き取りに相成るは情けなきことに候、我々兩人に二心あらざることに、能く君は知ろし召さるゝ筈なるに何、ごと彼等の申すことを信じ給ふか、何卒此のところに於て突合はせ對決仰せ附けられくだされたし　房「いふお兩人、扨ても汝等は大膽なるものなり、麿が知らんと必得て居るか、疾より汝等の

行ないしらしと存せしが、今日迄捨置きしは予が生涯の誤まり今暫らく猶豫いたさば汝等兩人申し合せ終には予を毒殺いたさんの心得であらう　藏「エヽッ何と仰せられる毒殺おどゝは穏やかならざるお言葉　房「默れ其の方等惡事を蔽ひ隱さんといたすれども既に此の方に證人あり、如何に孫三郎豫々申し附けたる評人道庵を是れへ引立つて參れ　孫「委細畏こまり奉まつる、と立上つたる孫三郎、高手小手に縛しめたる醫者大谷道庵といへるを引立つて參りました

第九席

惡人兩人は顏を見合はせて、道は如何あるあとであるかと、氣に取られて只だ茫然といたして居る内、元親恐る〳〵頭を上げ「元恐れながら御傍はらまで伺がひ奉つる、我々昨夜是れなる執權の宅へ乱入をいたせしが、斯くまでに惡事あるとは知らざりしに、御

領主様は如何にいたして道庵といふ醫士を語らひ、容易からざる密謀を遂ましういたされんせしを、御調べには相成りしか、扱ても御賢慮のほど恐れ入り奉つる　房「ウム豫々この兩人のもの、容易からざる行ないありと承まはり小姓久留金之丞に能と落度をいたさせ、差扣へ申し附けて置いたるところ、淺山藏人密かに金之丞を己れが屋敷へ呼び寄せ、恩を以つて我が傍はらへ近附け、惡人に加擔いたさせしを金之丞却つて先方の油斷を見澄まし、一々我方へ惡事の次第を告げるとも知らず彼等は無二の味方と心得居つたるよそ即はち天罰アイヤ金之丞は如何にいたせしぞ、孫三郎是れへ呼べ　孫「ハッ久留金之丞君命に候ぞ、早民御前へ出で玉へ」と呼ばはる聲に、ハッと心得てお次の間より恐る〳〵罷り出でたるは淺山栗塚が恩に掛け無二「味方と思ひ、己れの胸中を打明けたるものが御前へ出でたるあとゆゑに、今更に至つて何といふへき

言葉もなく兩人顔を見合はせしが、斯くある上は是非なしと、スックとばかり立ち上り君を臨んで摑み掛らんとおしたる樣子鼠却つて猫を嚙むとは、斯かることを申しませう、此の時盛親堪へ兼ねて樣側へ躍り上がり、兩人の襟髮取つて、ヤッと一聲掛けるが否や、忽ち樣下へ突下ろしたる其の働らきの早きこと目にも遮ぎるばかり元親に於ては久武吉郎に目配せをいたせば、兩人忽ちに組引いて有無をいはせず生捕に及んだり、夫れより兩人のものを厳しく押籠め申し附け置き、金子孫三郎より段々取り調べをいたしたるが固より證人もあり、證據物件もあることゆゑ一言の申し譯けもなく、其の上大川傳内より逐言上いたせしことゆゑ、兩人も終に服罪をいたしました是れによつて忽ち城下に於て兩人は磔刑の刑に行ふは大川傳内は斬罪獄門「妻子のものは門前追放」其の外兩人に與いたしたるを惡人ともは、それ〳〵御處刑を仰

と附けられ兩人の家財を取調べると、永年の間民の膏を絞り骨を削るやうにいたしたる金々財寶夥しくありましたが、是れは一國の人民へ對して別興へ下されました、さても元親等は舉動は賊に類母しきものとあつて、御召抱えにおらんとおしたるときに、元親等は「元親に有がたき仰せには候へども我れ〳〵は決して己れの榮華を願うにあらず、一つは國家のため、一つは領民一同の苦しみを除かんため、自然手荒き擧動をいたし候を、お咎めもなく却つて御賞美に預かり、身に餘るところの有がたきこと、存せしに、御取立に預かるおぞゝは、思ひも寄らざることでござる」とて強て仕官の義は御辭退申し上げしにより、曾我部の鄕をば改めて、元親に下し置かれ、播磨、宮内の兩人にも、夫れ〳〵地を賜はりました、夫れより元親は悴盛親と諸共に諸所見聞いたし、君のため人民のために道おき道に道を附け、橋おきとゝろに橋を架け其上文武兩道

を人民一同のものに敎えられました

第十席

然る處前にも申も通り四國人種の氣風として、頗ぶ義に强く文武の道をも嗜む者多く殊に鄉士が先に立ち、擦心に其の道を廣めんといたすことゆゑに迫々其の道も發達し、從がつて總て の事にも勵みまするから民の竈も賑はいまするやうにあり、領民一同は上の命よりも元親親子の言出したる事を能く守るやうに皆成りまして、勢ほひ沉然明神の如く、何れも其の德を慕ひ、然ればにや民の心豊かにして、道に落ちたるを拾はや、戸を閉さずして盜みをいたす者もないやうになり、實にやはを以つて一つの極樂淨土とも いつゝべき位ゐの有樣でございます、然るに房家卿は御病氣追々に募らせられ今や露命も短夕に追り、御嫡子康政公若年にいたして御自分が御蕊去にあつた時には、土佐一國の故治も覺束なく騷

召され元親父子を召玉いければ兩名如何なる御用なるかと取取ず掘り越し金子孫三郎の樂内にて、御病間御次の所に扣えまして兩人恐る〳〵手を事へました、房家卿頭を上げ、房「如何に元親父子なるか」元「ハッ久々にて御目通りを仰せ附けられ、有難き仕合せに存じ奉つる」房「其方等相變らず壯健にて、歷も滿足に存ずる」元「ハッ、恐れながら益々御機嫌能くと申し上げたくは存ずれども御病氣も未だ御全快に渡らせられず、我々一同一刻も早く御平癒あらせられる事を神に願ひ佛に祈り、御待ち申上げて罷り在りまする、今日火急の御召に豫かり取急ぎ罷り出で候が、如何なる御用にございまするや、仰せ附けられ下されたく、謹しんで承まはり候」房「イヤ其方等を招きしは餘の儀に非らず、今更ら申する事にはあらねども先年侯人共のために慮も既に命丁らんとおし北上容易ならざる騷動を惹起し、家にも係はるべき大事を、其方等の忠義に

依つて危うきを遁れしが、此度の病氣、愈よ差重り、迎も存命思ひも寄らず、去りとて見られる通り子息康政は苦年にして、未だ國家を治むるの才なく、只願むべきは其方等並びに金子孫三郎、麿も固より公卿の家に生れしとゆゑ恥かしがら能き家來も澤山にあらを、此後若年の康政を守立て、當國の民を治め、勿体なくも一天万乘の君の宸襟を安んじ奉つる者なく、是に依つて汝等兩人に相頼む何卒麿に成代り國家を治め呉れるやう、萬事宜しく頼み存ずる」ハッとばかりに元親父子は頭を擡に摺附け、暫らくは默して居りましたが、稍あつて進み出で　元「這は如何なる上意かと心得しに、思ひもらざる御上意慈ろき入り、奉つる不肖我々共、君に代つて國家を治めんなどとは恩ひも寄らざる事聊か民の信用を受け、相共に助け合ひ、互びに愛ひを除かん事を務め居れども、中々以つて國の政治を執るおもとは……

勇「アヽイヤ其の辭退は理りなが

ら麿の眼鏡を以ゆて頼む、殊に承はれば其方の祖先と申そは藤太子に事へ奉つりし、秦川勝の家柄なる趣むき、天晴なる名家なれば麿に代つて其方の人德を以つて國を治むるも盤かしからざる事であらう、萬事は麿大内へ推挙いたして遣はすが　元「ハッ」と兩人の者頭を下げて居りましたが何といふべき言葉もない位ででございまを

第十一席

夫より言葉を改めて御辭退を申上げたる處、何といつても房家卿は御許しになりません、金子孫三郎殿はらにあつて樣々に兩人を勸めましたに依つて、已むを得ず政治に苦任をいたす事になり固より正路潔白の豪傑一條家の爲、民の爲とあれば我が財をも抛うち身命を捨つるも厭はず、導ばら公平に事をいたしますから夫がために民は能く麿き其の勢はひ宏大に相成りし處元和元年

三月二日房家公は愈よ病ひ重らせられ、最早事終らんとなしたる時に豫々奏聞をいたし置きし事ゆゑ、大内より忝じけなくも孫左衛門元親を宮内少輔に任せられ、從五位の位を賜はりました、房家卿は既に危篤なるにも拘はらず、兩人を御召出しに成り、右の御沙汰に相成ましたに依り兩人は夢の如くの思ひをおし、謹しんでお受けをいたし夫より五日相經つて終に房家卿は冥途の客と相成りました、是に依つて若年ながら康政を以つて家督相續仰せ附られ萬事は元親父子、事務を執ることにありました、然るに隣國なる阿波の國司細川眞之、三好之康、房家卿の死去を承し、はり、屢々戰かひを催して參り、間宜くば土佐國を横領せんとするを、元親父子能く防戰をいたし度々三好細川の同勢を破り、夫が爲に隣國の諸侯も慄え戰のぎ、只今に至つては、手を出すものもないやうに勢ひ盛んにありました。人は總て三ッの運があるさうで幼年の運、中年

の運、晩年の運、此の運を取損ねると、生涯發達の出來んやうお譯でございます、如何に富貴の家に生れ、乳母や子守と數多の人に侍かれ、綾匹錦繻を細ふと雖ども、終りに臨んで、衰ろへて、人の情けに依りて生命を營おみ、或は、又食を乞ふやうお事がありては誠に詰らんものでございます毎度辯じまそるが、秀吉公などは幼年の折には能き事もなかつたが中年より晩年にゐの二ッの運を得られました、運といつて強ち前に知らせがあるといふ譯でもおし、只己れの心得で、是が向運の時節と思ふ時に飽まで辛抱をして何の業でも充分の働らきをいたせば必ら得られるのでございます別けて武士おどは最とも難かしいもので泰平の時には容易に出世は出來ませんが、乱國にあつては已れの氣量次第、昨日までは名もおき人も、一朝手痛き働らきいたせば、天下に名前を顯ろかし、後の世までも人に羨はれるやうに相成りま

を元親おとは所謂中年の運を得られたもので、前にも辨じたる通り、文武兩道は秀でゝ居る人が運に向ひし事ゆゑ、民は能く和し、大望悉くとく厚く、勿論己れが民を見る事慈母の赤兒を思ふが如くであります故から農民は次第にこえ、殊更悴孫太郎盛親は、父に劣らぬ英雄でございますから、此の父子の英名を承まはり、追々諸國よりして馳集まつて來り、元親父子に於ては賞を重くし爵を輕うして愈よ其の勢ひは宏大に相成つて參りましたる處、茲に阿波國に三好修理之進存保といふ大名がありまして、京都に居られる三好修理太夫長慶の一族にして、勢ひは宏大ありしが、元來强惡非道の大將にして、民の憂を顧りみず、夫に從がう家來共何れも虐勢を揮ひ、年貢苛役を夥だしく取立てまする

第十二席

夫がために農民殊の外憂ひに沈み、隣國土佐の領主元親父子の噂を聞いて、何卒此の君を迎へ奉つり我々も其の民となり、上と共に苦樂をいたさんといふ志ざし專ばらにて、既に人民は不穩の樣子あるを早くも悟りし三好長慶は、家來共に申附け、上を蔑しろにする處の大罪人とあつて、重立つたるものを兩三人召捕り、重刑に處し其の上家族のものを放逐いたし、頗ぶる暴政を振ひ、其の有樣虎狼よりも恐ろしく、此時人民の內にて心あるもの、土佐國へ至り、長曾我部の臣金子傳兵衛に事情を物語り、德兵衛より元親へ申入れたる處是を不便に存じ段々と其の樣子を尋ね彼等を諭し夫々扶持いたして遣きました處三好家にては此の事を承まはり、家臣大山五郎秀衆といふものを以つて土佐國高知へ使者として遣はし彼れ大勢の家來を從がへ、威風凜々として乘込み來り、隣國より使者の趣きを申入れ、元親に面會を求めました、吉良播磨久武宮內一同評議の上此段を主人に申入れたる處大將元親直ちに面會をい

たさんとのことに直樣案内をいたを大山五郎秀兼、主人三好の威權を笠に着て、上見ぬ驚の擧動にて廣々たる屋敷へこそは通る正面を見れば一段高き處に元親、左の處に長男盛親、吉良播磨久武宮内を初め一同の家來、整々堂々として扣えて居る、此の時姫倉九郎兵衛といふもの進み出で隣國阿波國徳島の城主三好修理之進殿の使者大山五郎と申す者の赴むきを披露に及ぶ　元「扨は其方が隣國三好の使者にてあるか、某がしは宮内元親といふものあり如何なる使者なるか、其處に於て口上を述べるやうに　五、ハッ初めて尊顔を拜し奉まつる、拙者儀は大山五郎秀兼と申するものに候此度態々某がしを以つて申入れ候は餘の儀にあらず領、地復村名主八郎右衛門を初め、領主に對し甚はだ不屈きの所業有之候に依つて夫々罪を取糺したる處、白狀いたさゞりしにより、國法に行おい候處、夫れに同志のもの両三名當國へ遁れ來り、主人を惡樣に罵り又尊公に對して穩やかならざるとを申し入れ候赴むき、確かに此方には証據も之有、依つて某がし推參をいたしたれば速やかに彼の者を某がしへ御引渡し相成らん事を願う、萬一御異存有之に於ては三好家の一存相立ち申さず、何卒御賢察あらんことを願う　元、ウム左樣にてあるか、某がしに於ては決して事を好み申さず彼等當方へ罷り越したるにより、段々相尋ねたる處、一通り尤ともある事情もあり、是により暫らく留置きしが三好家にて受取りに參る上は彼の者共を如何にいたそる御所存あるか　五「然れば にござる、仮令如何やうなるものありと雖ども、領主の命に背き、民にあるまじき擧動をいたせしものは、直ちに處刑を申附けるは之れ何處にても同じ國法でござらう　元「ウム其の儀あれば決して是を引渡を譯に相成らず、又只今其許が言葉の内に、萬一異存あらば一分相立たずとの事、一分相立たざれば何といたす　五「然れば

主人一存立たされば已むを得ず、干戈に事を断たへ申せの外致し方も無之族御存じの如く主人儀聖之進は、京都に於て時めき渡る足利將軍の嫡三好長慶の三族なるとを御存じにて候らはん、然れば事荒立つては御身のためにも相成るまじと必得る

第十三話

元「獣らつしやい先刻より舌長の一言奇怪の至り、三好家にいたせ何者にせよ、民を見ること慈母の赤兒に置けるが如くいたすあと至當からん然るに已れが非義の政治を行ない、聊か罪を犯せば とて、是れを嚴罰に當て偶々通れ巻りし者を、態々來つて受取らんとなすと雖ども、何ぞ夫を渡さんや、古人の言葉にて鵜島懐ころに入る時は是れを離たずとやら、目に一丁字あらざる愚夫でもら獣の如し況んや一國の主たる者をや如何世に時めけばとて、民を不當の弾に當てんとは苦々しき事、左樣な者に何とて渡すことの叶

ふべき速やかに立退つて右の次第を主人に申せ、若し其方に於て武器を以つて受取らんとなれば、我れ又是に當り、土佐武士の弓矢の程を見せ呉れん　一五「是は御言葉には候へ共、而仰せられる上は主人必ずや武器を以つて受取に參らん、其の時こそ御後悔召さるゝお身不肖おがら今日御掛合に參りしを幸はひに、當城へ一番乘をいたし貴所の御首は頂戴いたすと飽まで傲慢無禮なる一言に先刻より始終の樣子を伺がひ居かる、久武宮内の忰内藏介今年二十二才の壯年にはあれども、眼廻しまに切上げ　内「言はして置けば奇怪なる一言、イデや其の舌の根を引抜き呉れん」とヌックとばかり立上がり既に進まんとなしたる此時に元親大音を揚げ　元「如何に内藏暫らく待て先刻より彼の無禮の段々、其方怒つて是れを討たんといふ成光とも為れば、此奴も只一人にて當城へ使者に來りたる者を討取るといふも不憫の至り、今日の所は許し遣は

し追附け戰場にて汝心の儘に討取り候へ　西「ハヽッ君命已むを得ぬ然らば只今は許し遣はす、べし、如何に五郎とやら、我か面体を能く見知り置け我れこそは當家の執權久武宮内の悴内藏介と申そる者あり、愈よ戰かいを交ゆる時には、汝我れと一騎討をいたし快よく往生をいたせ、速やかに御前を立てよ、躊躇いたそに於ては我れ引立つて呉れん」とてズカ〳〵と進み寄り襟首取つて引立つたり、大山五郎以前の勢ひに似もやらず首を以つて引立てられ、這う〳〵の体にて德島へ立歸り主人修理之進に入れると修理之進大いに怒り、忽ち軍勢を催促して六千餘人の先鋒二千餘人の後陣を揃へ、整々堂々と土佐國を指して發向に及ぶ元親に於ても豫て覺悟のことゆゑに、夫々手配をいたし、阿波土佐の國境に於て雌雄を決せんと、人數を進む。

扨双方共出兵に及びしが、長曾我郎の先陣は金子傳兵衛、桑名太郎左衛門、中内源兵衛の三將二陣は久武宮内、細川源左衛門、三陣は本陣として大將宮内少輔元親長男孫太郎盛親、後陣は和賀因、幡吉良播磨惣勢合せて五千餘人、三好の先鋒は佐原壹岐、吉原上總、大山入道閑齋、二番は吉田惣左衛門大貫主馬、三番は大將修理之進存保、其外屈强の同勢を從がへ對陣に及び、日々戰かひをいたせしが、捗々しき事もなく、是といふのは元親は五千人三好は九千人、過半の相違がありまそから、元親方より充分に戰かいを進めまに居りました是に依つて三好は、敵の同勢捗々しく出でざるは、我が武勇に恐れたるものと相見へる、愈よ明日は惣攻をいたさんとて、軍を進むるの用意に及んだり

第十四席

此のとき長曾我部の陣にては一同の大將分を集め評議を凝し、望日早天に相成り双方共激しく鐵砲を撃ち合ひ、彈煙りの内に包ま

れて激しく戰かひに敗ひしが、長曾我部の先鋒副もそれば浮足となり、おとろになつて崩れ立つ樣子、三好勢是れを見て大いに喜び大將存保烈しく下知を傳へ、此の時大山入道閑齋とて、身の丈大尺七寸、力飽くまで勝れたる人物、自から陣頭に馬を乘り出だし、十二貫目もあるところの、先を内角にいたし、手許を圓くおしたる鐵の棒を押取り、縱横無盡に駈廻れば夫れがために忽ち散を乱して崩れ渡り惣敗軍に相成りました、逃げる敵を追駈け〳〵大山入道只だ一騎、段々と追ひ込んで參りまそる内に、思ひも寄らざる横合より乘り出だしたる一人の若武者、小櫻縅の鎧を着し同じ毛糸五枝綴の兜を頂だき、猛々緋に金を以つて抱稻穂の定紋を縫おしたる陣羽織を着用し白撫磨きの小手脛當、太刀を脊負ひ、脇差を帶し黑毛の馬に白覆輪の鞍置いて打ち跨がり、南蠻鐵船底形の鎧を踏ん張り、二間柄鎗長の鎗を押取り、進み來つて大音揚げ

盛「如何

に夫れなるは三好方先鋒の大將大山入道　必得たり、疾く申し素がしば土佐國高知の城主長曾我部宮内少輔元親の嫡男孫太郎盛親といふものなり、イデヤ一槍見參せん」と呼はりあがら鎗を捻つて進み來る大山入道カラ〳〵と笑ひ　閑「退けよ童汝如きの小數を對手にする我にあらず、討取るは易けれども健氣の志ざしに免じ許し遣はす、ハヤ其所退き候らへ」と飽くまで侮とり輕んじたる一言、孫太郎大ひに笑ひ　盛「汝匹夫口の横に裂けたるまゝ、慾なる雜言を吐くものかな、若年なりと雖ども我れが鎗先の味を見候らへ」といふより早く、突掛つて來る、大山入道　閑「汝れ猪小才なり」と鐵の棒を風車の如く、振り廻はし微塵にかれと打ち込み來る、心得たり盛親は左手に轉し右手に開き千鎖万化の秘術を盡し、万字巴と鎗を廻し、颯もすれば突き倒さんの勢ひ、入道閑齋初めの程は侮とりしが、其の勢ひに大ひに驚ろき、道は天晴若年の小腕

に似合はざる彼が擧動と、愈よ鐵棒を振つて打ち込んで參りしが孫太郎の鎗先のために突き立てられ、數ヶ所の薄傷を蒙むり既に危うく相見にたり、然るとみろへ吉浦上總（豐回吉原上總とせしは認まり）。騎馬を飛ばして乘り込み來り、上「如何に大山氏、苦戦のやうに見受け候、拙者其の敵引受け申さん渡し玉へ」といひながら薙刀を振り廻して横合より進み來るを、關齋固より强情我慢のもの、ゆゑ、闘「イヤ千萬忝じけなくは候へども我れ何ぞ斯の如き小敵に懸ろかんや、今此奴をナブりものにいたして居る處あり上ハ、左樣でござるか、去るにても某しの見る處にては侮どりがたき少年と心得候へば、御加勢仕つる」と横合よりいよ〳〵打ち込み來り、孫太郎兩雄を對手に、戰かひに及ぶ此のとき一旦退ぞいたる長曾我部の先鋒追々に引返し來り、激しく戰かひに及んで居る處へ金子傳兵衛、若殿の孫太郎の働らきを眺め馬を飛して進み來り

傳「如何にや若殿、二人を對手に御勇戰と相見えたり、拙者其の內一人を引き受候はん」と鎗を取つて進まんとする

第十五席

此時孫太郎盛親大音に　盛「ヤア傳兵衛なるか忝じけなくは候へ共彼奴爾ど驚ろくに足らん汝は早く大將三好を生捕にいたせ、此の小敵は拙者一人にて澤山あり」と飽まで拂つた、廣言を吐まはりし大山吉浦の兩人愈よ怒り、双方より激しく打つて出でし處を盛親何如ある透や見たりけん叫んで突出す槍先に閑齋の咽喉を突いたり、アッといふ聲と共　より眞逆樣に落る、吉浦上總大きに慌て薙刀を押取り朋友の　激しく切込んで來る奴を孫太郎体を轉して再たび渡り合つた時に傳兵衛槍を捻つて　傳「若殿御助勢仕まつるといひざま吉浦の鎗の劍合せより健たかに突掛けられ夫がために上總に於ては馬より落つるを盛親忽ちの間に飛

下り、取つて押へて首を上げ、又閑齋の首をも上げ今日の大戦に孫太郎功名を現はしました、總て戦かひといふものは、勢の多少には依らんもので、一は勇氣膽力のありまする者が勝ちまするもので少勢ながら長曾我部の同勢烈しく戦かひをいたしたるゆゑ、三好方終に敗軍と相成り悉くとく引上げました、長曾我部の方には今日の功名を取調べたる處、孫太郎第一番の功名なり、此の時元親大いに喜こび、孫太郎に向つて

元「汝今日若年に似合はぬ、天晴働らきをいたせしが、去りながら劍は一人を倒すのみと兵書にもあれば、此の後一騎討は心に留めず、只軍器を以つて大敵を破るやうにいたせと仰せられました、夫より兩軍日々戦かひに及びしが一月ばかりの間雌雄を決せず、時に或夜三好勢俄かに騒ぎ立つるの樣子に、長曾我部の同勢扨は敵方より夜討の來りし事ならんと存じ夫々支度に及んで罷出さんとす、此の時に元親大勢を制し

自から陣頭に乘出して見てあれば、三好勢は意よ上を下へと混雜の体

元「如何に傳兵衛、予が只今三好勢を見るに、斯く混雜をいたすは敵に返り忠の者あるか、或は大將の身の上に容易ならざる變事出來いたしたるものと見へる、去りながら先方も只ならざる大將ゆゑ迂濶に乘出すべからず味方は堅く陣を守りイザといふ場合には直ちに出兵をいたすその用意いたすところ宜しからん」と指圖をいたす傳兵衛心得て候とて、支度をいたして居りましたが、俄かにワーッといふ聞の聲の中に交じつて、ソレ其所へ行つた、那方へ逃げた、此方へ行つたと、急かに長曾我部の後陣の方へ騒ぎ立つて參る樣子に元親馬を引返して見てあれば、思ひも寄らざる一体の同勢、ワーッと聞の聲と共に兜の星を輝やかし、各自に得物を押取つて乘込む有樣、這は抑も如何にいたせし事あるか、後陣には吉良播磨扣へて居れば、斯ばかりの過ちはあらじと心得し處如何

にして斯く騒がるゝかと思ふ内に、忽ち大勢の内より現はれる一人の大將元親の前に進み來り、天地も裂けよと大音を上げ

○「如何に夫なるは長曾我部元親殿と見受けたり、過日貴公と約束をいたせし大山五郎に候あり初度の戰かひに父閑齋を討たれ無念骨髓に徹し今宵こそ貴殿を討取らんと推參いたし候あり、覺悟仕玉へ」といふより早く柄の長さ三尺八寸刄渡り一尺二寸といふ大鉞を上げて打込み來り其の勢はひ實に疫神の荒れたる如くでございまを

第十六席

是を見て元親の近臣大いに驚ろき道は思ひも依らざる敵の推參いたしたり、ソレ討取れよと八方より押取圍ひ大山五郎は猪小才千萬おりと近寄る者を東西南北に切つて落す有樣は實に凄まじく相見へたり流石の元親餘りの事に呆氣に取られ暫らく猶豫いたして居りましたが

元「如何に中内源兵衛は在らぜや」と呼はれども如何にせん其の人其處に居らず已むを得ず元親自身太刀を引抜き大山五郎を應らつて居りまをる後ろの方に孫太郎はカラ〳〵と打笑ひ

盛「如何に父上、元「オヽ汝は孫太郎にてあるか其の場に於て何を笑ふや

盛「然れば某し笑ひしが餘の儀にあらず過日某し大山閑齋を討取つたる時に一騎討おゞを心掛るは大將の致す事にあらぜと仰せられしが斯樣の場合に相成つて左樣の事を申しては居られず

元「汝左樣に我れを愚弄をる勿れ早く來つて助け候らへ、盛然れば父上御免蒙むると大手を開ひて立向ひ

盛「如何に大山汝聊さかの力を以つて我が父を討たんとは奇怪の至り斯く申をる某がしは嫡男盛親に候

五「ナニ汝が盛親にてあつたるか先日の戰かひに我が父を討つたる曲者對手に取つて不足おし、イデや尋常に勝負に及ぶと眞向より微塵になれと打

込み來るを盛親とうりと体を轉し空を打たる五郎が取直さんとする鉞を此方に奪ひ取らんとする四郎大きに驚ろき世の中に斯んな無法な戰爭をされては堪らん己れが得物を用ひず人の得物を持つて討たんとは乱暴の奴だ是波してはならじとエイ〳〵聲を上げて互いに引合つて居りましたが頓て盛親が力を入れてグイと引たり引かれて五郎は鉞の柄を持つたる儘馬より眞逆樣に落ちたり慌ろいて起上がらんとする内に盛親飛掛つて取て押へ首を斬かんとなしたる時に元親大音に　盛「如何に倅其奴も若年に似合しからぬ天晴の者あり生捕にいたし候らへ」盛「心得て候」と腰なる鉄繩を取出し忽ちの間に繩を打つ馬る五郎を引立て假に出來置いたる牢獄へ打込みましたが然るに元親俄かに病氣といふので陣中上を下への大騒ぎ早速嫡男盛親を以つて惣大將に任せられ其後休戰に相成りましたが盛親は吉良播磨を本陣の樣先

へ呼出し久武金子を初め家の子郎黨堂々と居並びし時に盛親、席を進め　盛「如何に播磨汝へ對して尋ねる事あり　播「ハヽッ如何なる御諚に候か承まはりたし　盛「抑は餘の儀にあらず、先夜大山五郎夜討を掛け候砌り汝の陣より崩れ立つたる段、老功の其方にも似合しからぬ不心得千萬、之れ怠慢の心より生ずる失策にあれば其方の罪遁れ難し、只今屹度窮命申附ける、左樣心得よ　播「これなから若殿の仰せには候へ共、拙者強ち怠慢せしにあらず最とも嚴重に守護いたし居りしが　盛「默れ汝口の横に裂けたる儘己れが非を隱さんとそれぞれ我れ何ぞ免さんや軍令に依つて只今其方を制敗いたす左樣相心得ろ　播「仰せには候へ共拙者永年の間大殿に仕へ奉つり忠勤を盡し斯くまでお家榮え候事、大言には候へ共、微臣等の力も聊かは是あらんと存じ奉つる　盛「ナニ、汝の力を以て當家繁榮いたせしなどと憎ゝい一言畢竟左樣お事を慢き居

るがゆゑ事を過まつなり承まはれば陣中に於て酒宴あそを催はし居りしとの事最早猶豫いたす場合にあらずャア〳〵誰かある播磨を引立てエ……

第十七席

此時久武宮内金子傅兵衛左右より進み　宮「恐れ[illegible]す只今の仰せは我々至極御尤ともに存じ候へ共[illegible]とのみ申されも我々初め幾分か掟を破り候處も[illegible]口を開かんこと恐あれども只今播磨の申譯候通り[illegible]替えさせられ此度の事は御宥免あつて然るべく殊には大殿御病[illegible]勳功に氣に、て渡らせられ陣中夫れがために騒動いたすやうあとあつてはお家のために宜しからざるとに心得候　盛「扣えろ汝等播磨を助けて非を以つて理といたすか　宮「イャ左には依らはも君の仰せ至極御尤ともには候ちへ共只々老臣播磨を此の處に於て罪に

行ふい玉ふ時は陣中の騒きとも相成申そべく　盛「扣えろ、播磨が老臣なればとあつて怠慢の罪あるものを糺さざれば却つて陣中の亂れと相成らん若年の某しと侮どり手を押へんとそれとも何ぞ汝等のために押へられんや我れ不肖おりと雖ども父に代つての怨大將あり我が命に背くものは即ち軍令に背くも同じ早々播磨を罪に行なへと烈しき指圖金子久武を初め言葉を盡して樣々に諫むると雖ども若年の大將怒り鎮まらず己むを得ず左右より宮水三平、倉田齋宮進み出でゝ　三「播磨殿、上意でござる」と手を取つて引立んといたす　播「是はしたり各々暫らく御待ち候らへ、我れいふことあると兩人の手を振り拂ひ進み出でゝ何事をかいはんとすると　盛「ャイ〳〵　播磨最早汝等のいふことを聞く耳持たず既一我が下知に背かば死罪申附けると烈しき指圖再たび兩人左右より進み　三「上意に候なり御立ちなされと樣より引下ろし

忽ち高手小手に縛しめました此時播磨怒れる眼に朱を注ぎ盛親をハッタと睨み　播「我れ聊かの罪ありと雖ども舊功を思へば何ぞ罪に行ふべきにあらず況んや此方の落度にもあらざるものを大殿御病氣にて惚てのことを謀しむべき折柄血氣に逸り若大將斯ばかりに苦心致せし長曾我部の家も最早是が終りに本立て其の間へ播磨を引据え左右の手を嚴重に結附け又二本を足の方へ打附け左右の足も夫へ結へ盛親將几に掛つて是を見聞おし力強なる武士に申附け散々に是を打擲いたす見る〳〵間に皮肉は破れ血沙滂々と流るゝを臭齒嚙めて耐へ〳〵て折々頭を上げ盛親の非道を罵しるを　盛「斯ばかりのことにては未だ聞かず我れ自から是を打擲いたさんと家來に渡して置きたる棒を押取り　盛如何に播磨是にても汝の心は直らざるや如何に〳〵と

續け打に打据えたり流石の豪傑吉良播磨も心神腦乱をいたし眼を閉ぢたりしがウームとばかりに氣絶の体、ソレ手當をいたせと引下ろして藥を服ませ直ぐに豫て三好の使者として來りし大山五郎秀俊を入れたるあとのありし假牢の醫室へ押籠めました

第十八席

一同の家來共は餘りに手荒き制敗に、ア、氣の毒なるは吉良氏なり如何に軍令あればといつて是程にいたし玉ふにも及ばざるものを殊には老人等言葉を盡して御諫を申上げたるに彼の体たらく餘りといへば慘酷非道吉良氏の存命に如何あらんと心ある者心無き者も皆其の苛酷なる處の行ひに目と目を見合せ歎息をして居りました夫よりも尚日々播磨を呼出し吟味をいたしまするが併し別段に播磨の敵に内通いたしたといふ証據もあらざる事ゆゑ其の儘にいたして置きました、

今宵は雨風激しく番をいたせし士卒に於ても　甲「ヤレ〳〵夜の長さに退屈をいたす我々共何の因果で斯様お役に當てられしか質にどうも徒然ではござらんか　乙「左様〳〵我々ばかりではお偉い御家老吉良殿の氣の毒さは實に言葉にも盡せん位ね　播「ウーントーン如何に夫なる番士　甲「何か御用でござるか　播「除の儀ではあいが光刻より雨が甚く殊には風を交ゑし様子役目とは申しながら艘に大儀である　甲「ネヽ恐れ入ります決して手前共は役目のみゆゑに、大儀苦勞とも存じませんが併しながら御大身の貴所様が定めしお苦しいのであらうと存じます是といふのも大きお辭では申されませんが若君の御短慮ゆゑと一同申し合つて居ります　播「ウヽ其の志しは忝じけなう存ぜる就ては其方等に頼みがあるが少々酒を用ゐたく相心得る夫といふは斯様な穢おしい處にあつては酒でも飲まんければ迚も凌ぎが附かん御苦勞

ではあるが内々酒を整のへて貰ひたい其代り手前出牢をいたしたる節は百倍にして鳥目を返禮いたす　甲「委細承知いたしました少々の間お待ち下さるやうにと四五人の者相談をして居る處へ密かに忍び來たれる一人ビヤ〳〵ビヤ〳〵と足早に近附いて參りましたから　乙「コレ〳〵其方は何者である當所を何と心得る　○「ハイ拙者儀は吉良播磨の家來　乙「ナニ吉良播磨の家來何の用があつて是へ參られた　○「御存じの如く主人は冤の罪に據りまして長らくの間斯様お處に押込められ嘸や難澁であらうと心得今宵の雨風を幸はひ聊さか主人へ手當をいたし殊には各々方様へ對しあも失禮ではござるが粗酒を一献獻上いたしたく宜しく御取計らひを願ひたい是は聊さか弟の印しでござると取出したる金子を見て　乙「イヤ是はどうも御厚添忝じけなう存ぜるが……何と中村如何いたしたものであらう　甲「左様さ斯様

お物を申受ては相成らんのでござるが是が他國の人ではおし御當家にては大切なる御家老様の事ゆゑに別に仔細もあるまいと心得る　乙「如何さま拙者も左様心得る然らば添じけふう受納いたそ實は只今御家老の仰せは酒を飲みたいとのとゆゑ△我々共只今酒を整のへて上げやうと心得て居つた處で　○「ハア左様でござるか夫は添じけなう存ずる幸はひ持參いたしたる是ある酒肴主人へお進はしを願ひまそ各々方に於ても一獻お過しに相成りたい　甲「イヤどうもいろ〳〵と心に掛けられ有難く存ずると番卒等何れも飲口と見へ殊の外喜こひ、右の酒肴を受取つて吉良の家來を返し夫より播磨の方へと酒を入れ己れ等も充分に食ひしが何時の間にかは、番卒共、前後不覺に眠りました、

第十九席

稍雲は晴れ雨も歇み元の如くの晴天に相成りました、時しも九月中旬の月は天に一面の鏡を磨滑せしが如く皎々と冴渡る獄屋の内には思はず洩る播磨が歎息　播「ア、如何されば我れは斯の如く不運なるや永年の間苦樂を共にいたし漸やく勢ひを得玉へし我君は俄かの御病氣、若年の君は志慮足らずして人を見ることを知らず積年の功も茲に空しく水泡に歸し斯の如く慘忍なる扱かひをさるるとは如何なる天魔の若君に魅入りしことかと眠りもやらず茫然として居る時羽目を隔てし、大山五郎　五「如何に吉良氏御心中の程さこそと御察し申す君の如き天晴智勇の勝れし御方、僅かの御過まちを以つて牢獄に繋がれ長曾我部の運命も最早これ限りに候らはん願はくば御邊と我等と心を一にして當所を拔出で死を共にして退散に及ばんと存ずる思召しは如何にと　播「默れ汝が前夜夜討を掛けたる事ゆゑに其の怠たりの罪を以つて我れは斯の如くの目に遇ふたり仮令又此の所を出でると

雖ども何方如何なる人を賴まんや　玉「イヤさうでござらん拙者○主人三好存保氏上を敬まい、下を憐れみ人を見ること明らかにして天晴の名君あり殊に御邊は元山名家の臣にして山名と我が主人とは緣合の間柄さすれば僕が御同道をいたし推舉いたせば必らず君喜こんで重く用ゐ玉ることと疑がひなし如何に賢慮を廻らし玉はずや　播「いふな玉郎、汝の甘き言葉に依り我れ爾ぞ此の所を免れん仮令如何なる事ありとも君の命とあらば死をだに惜まじ　玉「イヤ〳〵其のお言葉は聊さか相違いたす君君たらざれば臣臣たらずと聖賢は曰まいしにあらずや夫に依つて我れと共に當所を拔出し玉ふとも誰れか差つる處あらん」とさま〴〵に辨を工みに說かれましたが播磨は何んどもいはず暫らくの間差俯向いて居りましたが播「如何に大山御邊のいはれる處理なきにもあらざれども我が妻子は高知の城中にあり我れ此所を逃るれ

ば忽ちも妻子の一命に及ぶは必定さすれば愈よ我れは不義の汚名を千載に殘すこそ口惜き限りに候」との一言に流石の五郎秀兼說伏ねて暫らく默然といたして居りまず内に、メリ〳〵メリッと獄屋の後ろの塀を押破りスッと出でたる一人の武士、播磨はこの物音に驚ろいて何者かあるかと振返り差込む月の光もて互ひに顏を見合せしが　播「ヤー夫に參りしは細川源左衛門にはあらずや源然れば仰の如く源左衛門にて候扨も吉良殿御運の末こそ情なかく候貴殿も斯かる獄屋の内に苦しめられ又氣の毒に存ずるは女妻なり　播「エヽッ妻の身の上に如何ある事のありしか　源「然れば妻女は深く貴殿の身の上を案ぜられ人に顏を見らるゝも心憂しとて、一子武之助殿を一刀に刺殺し返す刀を以つて自殺を遂げられました　播「ナニ妻は自殺をいたし武之助までも刺殺せしとなアヽ不憫な事をいたしたり此上は細川氏如何にいたして宜

からんか　源「然れば某がし是上へ參りしは御邊の心中を承まは り微力を盡し當所より救い出し何れへなりとも身を沈着け主人 あれども盛親を討ち玉へ　播「ハヽア添じけのふ存ぜる親戚の間 柄とはいひながら危うきを顧ぜ當所へ忍び來たられて某しを救 ひ出さんとせらるるとゐを喜こばしく存ぜる萬事源左衛門殿御邊 に宜しく頼み參らせる　源「如何にも承知仕まつる……。

第二十席

播「最早當家も永く勢はひを保つ能はずと必得る　源「いふまでも なく血氣の勇に任せ已れが我儘を行おはるゝ盛親殿を[illegible]み各々 心を醜がへし戰かひをなすべき氣力もなく五百人の内に血氣の ものばかり一百餘人を撰んで實は貴殿を救はんと密かに謀し合 せたれば心置おく其の内にて支度をいたし出でられるやうに小 脇に搔込んだる大小並びに一の包みを其の所へ差出せば道は悉

しけおしとあつて今まで着せし衣類を脱ぎ捨て包みの内より出 せし所の衣類を着け覺にの兩腰を腰に帶挾み　播「然れば細川 源「如何にも御同道をいたさう　五「イヤ細川氏とやら暫らく待ち 給へと　源「ウム何人でござる　五「然れば拙者は先夜生捕りにお りし大山五郎秀泰でござる各々是れより何れへ立退き給ふか は知らざれども願はくば我れをも助け出し給へ然れば某し各々 を御案内いたし三好存安に進呈をおし必らず共に吉良氏の無念 を晴し申そべし　源「ウム其の言葉に偽はりあくば助け出し申す べし　五「道は疑ひ無き一言かな此の期に及んで何をか偽はり申 そべき天地の神も照覽あれ虻度此のあとを誓ひ申すべし　源「然 ればとて源右衛門忽ちに堺を破り五郎を初め其々に生捕にお したる三好の臣五六人是れをも元に連れ出し密かに當所を抜け 出して夫れより直ぐに三好の陣中を差して參りました然るに三

好の陣にては此の頃双方共も戰かひもなく大將存保本陣にあり生老信德永石見一同のものに申し附け嚴重に相守つて居りまする處へ我が陣所を望んで近附き來るものこゝあり左右より番兵槍を引提げバラ〳〵ッと進み出で　○「ヤー〳〵夫れへ來つたる其の方共は何者あるか當所を何と相心得る　五「然れば木瓜の紋を見れば老心德永殿の御陣と心得推參したり拙者儀は大山五郎秀衆に候石見殿へ見參をいたさん　○「是れは何誰かと心得しに大山殿にてございしか如何あることにて斯くの如きお姿にてお出でに相成りしか　五「イヤ是れは種々深き仔細もあり宜しくお取次を願う　○「委細心得ましたと早速本陣へ此のことを申し入れると生悟石見は不在に番頭役梶田重兵衛其處へ參り是れは〳〵大山氏にはお珍らしいではございらんか如何遊ばした　五「イヤ梶田殿是れには深き仔細あり早速石見殿はお目に掛りお話しいた

さんと心得たるが御不在の趣むき、何れへお出でにおりしか　重「然ればでございる主人は御存じの如く用心堅固のお方ゆゑ諸陣見廻りとしてお出でになりましたお在陣がなくば是非に及ばん是れより手前は山内參いたせし處方へ推參をいたし陣中通行をお許しに願ひたい　重「委細承知いたしてございるる跡より大勢見にられるは何人なるか　五「是れは拙者同道をいたして參つたるものにて決してお心遣ゐのものではございらんゆゑお通しを願ひたい梶田重兵衛考へたが大山五郎は先達て討死をいたしたる大山入道の伜にて當家に於ては時めきしものゝ一旦生捕になりし處を、只今如何にして歸りしかは知らざれども通行を許しても差支へはあるまいと心得ましたから重宜しうございるお通りあさい　五「然れば御免を蒙むると梶田重兵衛の案内で諸陣を通り抜け同じ老臣山内圖書といふものゝ方

へ參りました同じ老臣でも德永石見は天晴智勇の武士でございますが此の圖書といふものは侯奸にして志慮分別のない男で始終石見に功名をされ己れ功名のあらざる處へ大山五郎が長曾我部家に名代の老臣吉良播磨細川源左衛門の兩人を引連れ罷越したりと承まはり殊の外喜こび早速面會に及びました

第二十一席

圖「是は〳〵大山氏には宜うこそ見えられた先夜は貴殿一人天晴なる働らきをいたせし越むきなるが運拙なくして敵に生捕られ某がし初め殘念に心得、恢復戰かいをいたし貴殿を助け出さんと存じたる處兎角に石見は敵を恐れ味方の勇氣を挫いたることゆゑ我が計畧も行なへず空しく拳を握つてあつたりしが流石は貴殿どうして是へ見へられた　五「然ればでござるお話し申すも面目次第もござらんが……

圖「ナニ面目おきことは更にござらん

昔しより英雄豪傑敵に生取にありしと敗ふるに遑あらず獨の關羽の天晴ある豪傑なりと雖ども呂蒙の計畧に掛り生取になつたり又我朝にても在捌平太其の他天晴勇士豪傑も生取にありし例あり爾ぞ恥とするに足らず、シテ如何にして遁れ參りしか　五「イヤ御賞美に預かつて近頃赤面の至りでござる是へ召連れ參つたは長曾我部の老臣吉良播磨、細川源左衛門と申するものに候宜しく御言葉を賜はるやう　圖「オヽ左樣であつたるかヽテ又其の兩人を如何にして召連れしか　五「其の始りは盛親性短慮にして是なる吉良播磨を牢獄へ投じ播磨は己に自殺をいたさんといふ處、此の細川源左衛門といふ親戚のもの見えられ漸々に說き來はく云々斯々を始終を物語り斯樣な次第でござるゆゑ兩人共に宜しく我君に事へ奉つり妻子の仇を報ぜんと致その心得で御貴殿の御取做を只管ら願ひ奉つる　圖「扨は當家に取つて恐悅至極、長曾

我部の滅亡も最早近さにあり如何に播磨源左衛門とやら拙者は老臣山内圖書でござる見知り置かれるやうに　播「恐れ入つた御一言大山氏が只今申上げたる通り某がしと吉良播磨と申する不東者　源「又拙者儀源左衛門と申するものにござるが宜しく御目を掛け下さるやうに尤とも大人の御高名は豫々承知いたして居りし處、幸はひに此度拜顔を遂げたるは誠に我々の喜こぶ處にございまする　圖「イヤ其の叮嚀のお言葉では近頃痛み入る併し石見に劣らぬ處もある某がし斯く申さば朋友を非謗するやうに當るが元來石見は小膽にして疑念深く各々が斯く見えをれたりといへども快よく面會もいたすまい拙者は又各々の參られたを此の上もなき喜こびといたを以來は萬事計畧を共にいたし申さん先づ〳〵悠りと休息をいたされるやうに　播「忝じけなう存ぜると是より酒肴に及びましたが播磨は未だ傷所が痛みありとて酒

を過さず樣〳〵辨を飾り圖書の心に叶うやうに媚諂らい圖書は又詭り顔に　圖「斯くなる上は某がし一身に引受け各々方のお身の上は飽までお受合い申すといつて其の夜は我が陣へ留置きまもした扨翌朝に相成り早速此の話しを修理之進存保に申し入れまもると存保大いに喜こび忽ちに目通を仰せ附られ三人のもの圖書の案内に從がい各々服を改ためて御前へ罷り出で一通り御禮を申し上げ大山秀榮より改ためて一々君へ言上をいたし修理之進殊の外に喜ばれ追つて沙汰に及ぶと其の儀秀榮に兩人をお預けに相成りました。

第二十二席

入替つて御前へ罷り出でたる老臣德永石見　石「扨我君へ改ためて伺がひ奉つる　在「石見何事であれ　石「然ればに候、此の度大山五郎卒くも敵陣を過れ吉良播磨、細川源左衛門といふ兩人を初め

數多の者を召連れ候越むき、全たくに候か　存「如何にも喜ばしきことではないか敵の内にも勇士の聞えを取つたる兩人元親を恨み妻子の仇を報せんとて我れに降參をなすとは當家繁昌の基ぬである　石「恐れながら石見は聊かさか疑がひふかきにしもあらず彼等兩人は元親股肱の臣にて一朝のことにも盛親に背き君に降るなどといふふとは思ひも寄らず　存「イヤ石見其方は人を疑がうの癖わるが其昔し八幡太郎義家奥州征伐の砌り、衣川三郎太夫阿倍宗任を生捕り我が手許を差置き臣の諫めを用ゐず寢食を共にいたし宗任固より偽はつて降服いたし間宜くば義家を害さんの心あらしと雖ども義家曾て是れを疑はず殊の外寵愛をいたせしに依り一旦志ざしを翻へし無二の忠義を盡せしといふこともあり況んや播磨源左衛門は一旦は盛親に從たがひしが固よりさせる恩賞もなく却つて慘酷なる盛親の扱かひを怒つて遁れ來りし

者あれば更らに疑かう所あし　存「アヽコレいふあく其方の理屈は聞倦きて居る、兎角世の中は理屈ばかりでは治まらぬものであるぞ理外の理といふあとを心得んかといふものは石見は猶も諫めんといたしましたが更に御取用ゐがございませんに依つて容を改ため　石「恐れながら此の上からは決してお諫め申さず只兩人の者へ某がし面會を仰せ附られたし其上實否を糺したく　存「ウム其返は差支へなし早速面會を申附い　石「忝じけあう存じまする夫りよ改めて大山五郎に申附け兩人を其處へ案内いたしました石見播磨源左衛門に向つて　石「如何に各々只今よりは同じ三好の臣かれば宜しく御則懇を願う　播「恐れ入つてござるといひつゝ面を上げたる兩人を暫らくの間見詰て居りしが俄かに言葉を荒らげ　石「汝奥の蒼の例に習ひ我君を曹操の如き者と心得て偽はりの降參をあすと

誰とも爾を左様なる許畧に陥らんや汝等深くも言合せ我君を死地に陥入れんとする討畧であらう　播「是はしたり斯る御疑かひを蒙むるとは近頃情けなきことに存ずる　石「黙れ汝最早舌を動かす勿れ、ヤア〳〵一同の者兩人を搦め捕れと烈しき指圖に心得て候と猛々く支度をいたし居つたるものと見へ前後左右より屈竟の勇士十四五人バラ〳〵ッと現はれ出でアワヤ討手も掛らんず有様圖「寄大いに驚ろき　圖「是はしたり徳永貴殿は物に狂はれしか己に心底の相解りたる兩人を御前に於て漫りに我意に募り搦捕らんといふは寄怪の致りに候　石「扨は御身は播磨の舌に欺むかれしと見えたるな　圖「ナニ某がし播磨の舌に欺むかれしと　石「如何にも欺むかれたに相違あるまい御身ばかりか我君をも非々に欺むき當家を滅ぼさんといたす此奴等の計略を知らざるか　圖「是はしたり傍若無人の其の一言聞捨にならぬ今一言申して見

られよ其儘には捨置き申さん　石「ナニ拙小才を我身に對して指にてる差せるものなら差して見よ　圖「オヽ如何にも差して見ると既に摑み掛らんといたしました。

第二十三席

此時播磨は小刀の鞘をスラリと拂ひ　播「恐れながら君某がしが二心なき心底を御覽に入れる最早是までに候あり」と諸肌を押脱ぎアリヤ腹に突立てんといたしました源左衛門も非々に脇差を抜き腹へ突立てんとする樣子を御覽におつたる三好存保　存「ヤ〳〵兩人暫らく待て汝等の心底相解つたり決して我れ汝等を疑がはず如何に石見斯ばかり兩人の赤心見えたる上からは其の方に於ても最早疑がひは解けたであらう　石「恐れながら斯ばかりのことにて何ぞ疑がひの解け申さん　存「ウムシテ如何にいたせば疑がひ相解ける　石「然れば兩人全たく降參の賀を見せん

とあるかれば敵將元親の首を上げるか左もなくば先陣を勤め充分功を奏せし上ならでは某がし決して疑がひは晴れ申さん　存「成程尤ともの至りなり如何に播磨源左衛門汝等石見の言葉を承はりしか　播「ハヽッ如何にも石見殿のいはるゝ通り我々先陣を勤め一廉の功名を御覽に入れ申そべし　存「ウム左様いたして全たく二心なき証據を現はそべし　播「ハヽッ仰せに從がひ申さん宜しく御老臣のお指圖を賜はりたし　石「如何にも承知いたしたと夫より石見は敵を討つべき計畧を献じ翌日にあり愈よ戰かひを進めましたが三好の先陣を播磨源左衛門の兩人に命じ双方共に貝鉦太鼓を打鳴し追々に進んで參る此時陣頭に乘出したる吉良播磨存保より拜領おしたる綺羅美やかなる鎧を着用して太き逞ましき馬に打乘り槍を捻つて乘出したる有様勇氣凛々として四邊を拂ふばかり續いて源左衛門も同じく見事なる扮装をし

て乘出して參りました此の時盛親の陣中に居りまする大將は先陣久武宮内桑名太郎兵衛の兩人にて中にも宮内は吉良播磨をハッタと睨み　宮「如何に人面獸心の播磨此所に出でゝ我が申することを承はれ汝に於ては永年の恩を忘れ君に背き奉つり剩さへ敵の先陣とかりしこそ憎くき擧動、イデヤ宮内が天に代つて誅戮をいたす快よく我が鎗を受け候らへと呼はつたり播磨大口を開いてカラ〳〵と笑ひ　播「如何に宮内汝口の横に裂けたる儘宜くも我れを罵しつたり我れ永年の間心を同じうし忠勤を盡したるに僅かのことにて非道の擧動をいたせし盛親に何を以つて從かい居らんや其上妻子に於ては恨みを呑んで自殺を遂げたり是といへるも汝等傍はらにあつて我れを讒言せしと憶にたりされば重なる遺恨已み難し先づ第一に汝の首を刎ね呉れんと、呼はり、ながら馬を乘出したるを心得たりと宮内に於ても同じく馬を乘

出し上段下段と火花を散し鎬を削つて千變万化の秘術を現はし戰かひに及べると三十餘合にして未だ勝負決せざる時、細川源左衛門横合より進み出で　源、如何にや宮内源左衛門の鎗先を快よく受けよと呼はつて突掛つて來る奴を傍はらより桑名太郎兵衛進み入で細川源左衛門を對手とおし人交もせず戰かう内、兩軍共に閧の聲を作り討ちつ討たれつ暫らくの間、憤激突戰をいたして居りましたが此の一騎討の勝負は終に物別れとおりしが吉良、細川の兩人は莫大の働らきをいたし長曾我部方は散々になつて敗軍を遂げました是によつて德永石見の疑がひも解け其の德號戰をいたしましたが始終の樣子を御覽におつたる三好存保並びに山内圖書は大ひに其の功を賞し夫より兩人に五百人の同勢を授けられ一軍の大將に命せられました、

兩人は能く部下の者を勵はり君へは飽まで忠勤を拙んで朋友には信義を盡したることゆゑに遥々一般の人々にも重く用ゐられ軍議評定の席にも臨み自由に發言をもるゝことを許されました扨この戰かひも誠に長く相成りましたして終に双方共に一度歸城いたすゝとに相成り修理之進は一ノ宮の城中に引取り夫より時々播摩源左衛門の兩人をお召しにあり軍學其外の事をお尋ねになると彼等兩人水の流るゝが如き辯舌にて滔々と御答へ申し更に一点の淀みもなく實に天晴なる勇士とこそ見られました扨る其の年も明け翌年天正五年三月の初旬元親病氣全快をいたし先途の恥辱を雪がんとし急に攻寄せて參る赴むきを俄かに注進に及びました承はつたる修理之進忽ちち支度に及び是亦乘出して參り此度は播摩源左衛門兩人に先鋒を申附けられ石見は一ノ宮の城に殊されました是といふは山内圖書が石見出陣をいたす時

は已れが功を立つること能はざとて様々に君へ對して讒言を搖へ修理之進又其の言葉を用ゐ大切なる忠臣を本城へ留置くことに相成りました是れぞ良藥は口に苦しの慣ひ君の爲を思ひ辯を飾らず飽まで眞實なることを申上げたるに依つて存保も心に叶はざるものと見へる愈よ両軍相接し暇かひ両三度に及びました

四日俄かに山内圖書の陣屋に於て上を下へと混雜をいたし火事が捗々しき事もなく徒づらに月日を送りまする内に頃しも五月よ夜討といつて八方四面に散乱をいたそる樣子修理之進自ら乘出して見れば容易からざる樣子にして山内の陣ばかりにあらず大山秀能の陣にも燃移り焔々と立登る炎は天を焦すばかり火の子は天に梁地を書いたるかと怪しまる孝保この樣子を見て大音お上げ　存「播磨は居らざるか源左衛門はあらずや早く取鎮め候らへ」といふ言葉の畢らざる内に両人馬をトウ〳〵と乘出し　播「

如何に播磨源左衛門此の所に罷り在り候　存「オヽ両名夫に罷り在るか早く取鎮め候へ此の虚に乘じ敵方より夜討を掛けられたる時は一大事あり　播「尊命には候へ共最早敵方より乘込みましてございます　存「ナニ敵方へ乘込みしとシテ敵軍は何れにあるや　播「然れば此の所に罷り在り候　存「此所に在りとは訝かしき汝の一言何れにあるかと修理之進馬を進めて尋ぬる内　播「然れば此の所に候敵といへるは餘人にあらず吉良播磨細川源左衛門の両人大將の御首を頂戴いたさんとて此所へ乘込み來り候　存「ナニ汝等我れに對し……　播「オヽ敵對奉つらんと存じ昨年より艱難辛苦して居つたりしが今夜あそ天の與ふる幸はひ貴殿の御首は我々両人にて頂戴いたすヤア〳〵　汝等　存「同早く三好勢を打留めよと両人の言葉の下より心得たりとわつて部下の同勢俄かに上げる関の聲と共に三好の旗下を押取り包んで討取らんといたせ、存

保大いに驚ろき　存「扨は汝等の計畧に掛りしか殘念の至りなり其の儀なれば我が鎗先を見候らへと家來に持たせた鎗を受取りリウ〳〵と扱いて突出さんをるす時幡磨源左衛門の兩人馬に鞭を當て引返して參りました此の時長曾我部の同勢より桑名太郎兵衛同じく安兵衛久武宮内同じく内藤介等の同勢忽ち閧の聲を上げて修理之進に突いて掛る然れば三好の勢に於ては本陣に大事ありといつて立騒ぐと雖ども敵の同勢に猛しく突立てられ散々になつて敗走いたしました。

第二十五席

本陣に於ては三好の家來驚れも主の一大事と相心得たるによつて是又必死の勇を奮つて一方の血路を開き此の處を逃れ漸やく半道ばかりも來つてホットいふ息を吐きたる存保　存「扨ても下郎は猪ふかたし我が忠臣の諫めを用ゐずして彼等兩人に欺むかれしこそ殘念なり去りながら危うきを逃れ一の宮へ歸り再たび同勢を肥し彼等を散々にして此の恨みを晴さん　○「ハヽ仰せの如くに候、去りながら彼れ此の所に伏勢を置かざるは誤まり軍慮の足らぬ奴と見るまする　存「如何にも左樣ぢや敵の此の處に伏勢を置かざるは愚かの至りと未だ言葉の終らざる中にドット揚げたる鬨の聲、眞先きに進んだる一人の大將、夜目にも光る赤糸紋の具足を着し同じ毛糸五枚鍬の兜を戴だき栗毛の駒に打ち跨がり雷の如き大音聲げ　○「愚かや存保斯くありし上は何とて汝を一の宮へ歸し申さん汝の來るを遲しと疾くより此の處に待ちたるは別人あらず元親の嫡男孫太郎盛親見參せんといふより早く馬を飛ばし鎗を捻つて打つて掛る三好の家臣大ぬに驚ろきさては敵兵此の處にありしかと狼狽騒いで居る樣子、長曾我部の同勢に於ては散々に打惱したる故存保は怒れる面体眞朱の如くにお

り大太刀を[illegible]に振翳し

存「オヽ汝は盛親にてあつたるか對手に取つて不足はあるまじイデや存保が最後の働らき冥土の案内をいたさせん覺悟をせよと討て掛る盛親カラ〳〵と笑ひ

盛「死に後れたる汝盛親の鎗の味見せ呉れんと突掛つて參るを存保も必ず死となり上段下段と秘術を盡し暫らくの間打合つて居りましたが其の有樣は宛然肉を爭そう虎の如く存保風を起せば盛親雲を起し雨を降らさぬばかりの勢ひにて砂煙りを立てゝ爭そつて居りまする時に長曾我部の同勢追々に乘り込み來り存保を十重二十重に押取包む此の時盛親大音を上げ

盛「如何に汝等大將分の一騎打ちをいたして居るに必らず指にても差してはならんとのことあれば一同拳を握り此の勝負如何あらんと見て居る處へ俄かに聞へる鬨の聲山谷に響き渡り、眞先に白地に黑き伊達木瓜を現はしたる旗を押し立て金の万字の馬印しを押立て整々堂々

と乘り込み來る其の勢千騎ばかり何者ならんと長曾我部方見てあれば眞先に進んだる大將は黑糸の腹卷を着用おし振乱したる亂髮に銀の如く二間拵の鎗を小脇に掻込み乘出したるは別人あらず三好の老臣德永石見破枯れたる聲を振り上げ

石「如何に[illegible]主君御無事にて在せしか一大事と承まはり石見推參仕つり[illegible]御心確かにお持ち遊ばせヤア〳〵

一同の者共卑怯未練なる長曾我部の同勢を破れと右手に采配を取つて打振れば心得たりと鎗組の武士兵士に下智を傳へ鬨の聲を上げて乘り込み來り八方十面より長曾我部方を押取包んで討取らんとおす扨てこそ敵の新手の同勢來つたり何條恐るゝ事のあるべきかと盛親方必死になり血戰をいたして居りまする時に一聲太鼓と共に雲霞の如くに乘り込み來りし抱稻穂の紋附いたる旗を翻へし手勢三千騎ばかりを鶴翼に備へ眞先に進んだる大將は病氣といつて高知の城へ

引取られしといふ惣大將長曾我部宮内少輔元親なり

第二十六席

元親自から眞先に乘出し大音聲に元「ヤアヤア一同夫に乘込みしは德永石見と見へたり彼は敵おがらも天晴なる勇士なり決して卑怯な働きをいたさず飛道具は一切用ゆるなと無用なり心得たりと此の同勢槍先を揃えて突掛りましたる只今では此の一騎討といふことは滅多にございませんが昔しの戰かひは他國はイザ知らず我日本では勝負といふ事を能くいたしました川中島の戰かひのお話しを申上けると輝虎入道謙信御船川を渡つて自身信玄の旗下に乘込み長先の鍛えたる大太刀を取つて信玄を望んで切込み信玄心得たりとて鉄の軍配打扇を取つて受けたおどいふお話しがございますが昔しは能く一騎討の勝負といふ事があつたものと見え

ますも只今は左樣な事は滅多にございませんが機械的の戰爭になつて居りますから大將が討死をするかもしれぬと云ふことは餘りないやうでございますも古しは前にも申したる通り動もすれば大將分の討死を遂げたる者多く然れば元親斯の如く下知を傳へ必ず死におつて戰かひをいたしました事ゆえ寡は衆に敵せざるの慣ひ如何に石見勇なりと雖ども一千の兵に三千の兵を引受けての戰かひなれば大いに破れ追々殘り少なに相成り其身に於ては二ケ所ばかりの手傷は蒙むりしが大將存保を助けんと愈よ必死の働きをいたして居ります夫が爲めに存保盛親の兩人は其の間を隔つたるゆえ危うきを免れて存保聊さか後陣の方へ引取りました此時石見に於ては馬に鞭うち大將の前に引返して參り石見「恐れながら今更申上げたる處何の益にも候はねと雖ども君には山内圖書大山五郎の兩人の言葉を用ゐ王ひ斯申する石見の言上

いたしたるとを御取用ひ無之、前夜より今日に掛けての此の苦歌今に至つて後悔遊ばした處が致し方も無之其の上敵は大軍にて味方は少勢追々殘り少なに相成りし樣子此の上は拙者是に踏留まり一命を抛ちて殿りを仕つり候間一度御本城へ御引上げあり尤とも御親戚のあとゆゑ細川實之殿へ對して御救ひを求められ候らはゞ御開運の時節も有之らん存保ハラ〳〵と落涙をいたし存如何にも石見今更に至つて赤面の至りなり我れ愚かにして汝の言葉を用ゐ佞人圖書五郎の爲めに欺むかれ斯く脆く敗軍をいたし多くの家來を討たれ剩さへ忠臣の其方を捨殺しにいたして、何オメ〳〵と本城へ引取り申すことの出來べき其方等に對し面を向くべきやうもなし死すべき時に死せざれば死に勝るの恥ありといへば潔よく此所に於て戰死を遂ぐべし　石「ハッ忝しけなき君の御上意心根に徹し候去りながら死は一旦にして易く生は末代にして得難し斯く申して居る內にも追々敵の同勢乘込み來れば少しも早く御引上げ無之ば犬死を遊ばす場合にも立至らん吳々も万金に得難き御身を損じ王はざらん事を願う　存イヤ〳〵汝の申を處忝しけなしと雖ども此儘なぞて引上げ申すべき存保智つて討死をいたし恨み重なる元親、親子間宜くば刺違へて相果て申さん　石「道は君にも物に狂ひ玉ひしか何とて左樣には仰せられるぞイザ御案內申をとて主人の馬の轡を取つて引出し給の石突を以て一當當てれば馬は忽ちシーンと斷なきしと見へしが疾風の如くに駈出し瞬々申附けて置いたものと見あて斯る亂軍の內より石見の同勢二百人ばかり殘らず主人存保の跡を慕ふて引上げました。

第二十七席

此のとき石見は主人の後影を見て居りしが最早是れにて必に掛

る山の端もあしイデや討死を遂げ先君の御恩報じ當君へ對して
の潔白の誠心を御覽に入れ奉つるサア來い來れと殘れる人數へ
下知を傳へ必死になりし有樣は摩利支天の荒るゝが如くでさ
いたし主人石見と共に最期を遊げんと勇氣凛々として四邊を拂
ひ實におかすべからざるの勢はひに聊か後れけん誰一人とあつて乘
り込み來りしが此の勢はひ此のとき元親の同勢追々に來
り出そもおく只々其の勇氣を賞賛いたして居りました元親
親子は馬を陣頭に乘り出し　元「扨て〳〵一同のものよあれかる
石見の擧動を見つらん彷彿若無人とは是れ等を申すべきか戰場々
數の武者振敵ながらも天晴あり願はくば我彼を味方に附け一天
万乘の君を守護なす大役を擔ふ場合に至りあば必らず役に立つ
べきものと思ふ此の場に討死さそるは不便の至りなれば何とか

して彼れを說き味方に附けたく思ふがどうぢや　盛「如何にも仰
せの如くに候と盛親初め側に扣へし家臣の面々異口同音に是れ
に同じ元親少しく馬を進め慇懃に禮を施こし、元「如何に石見我
等は宮内少輔元親にて候是れなるは息孫太郎盛親先刻より見
受け候處貴殿の軍器且つ武勇其の上忠義實に感服いたし候今御
邊を討つは心易くあれども貴殿如きの豪傑を討つに忍びず我れ
厚く足下を用ふるによつて願はくば存保を捨て我れに對し從が
ひ玉はざるや如何に〳〵と呼はつたり此の時何とも云はず默然
として兩眼を閉てゐつたる石見はカッと怒れる服を見開き　石「
如何に元親貴殿富樓那の辯を振ひ我れを說くと雖ども何とて貴
殿に從がひ申すべき　元「イヤ〳〵武士たるものは己れを知れる
ものゝために命を捨て婦人は己れを愛するものゝために形化粧
をするといはずや　石「去りあからそは全たくの武士にあらず忠

臣は二君に事へぬとは古人の金言仮令明君なりとも雖ども忠臣たるべきもの是れを見限り他の主に事ふる法やあらん況んや我が主人存保は天晴古今の名將なれども奸佞の曲者圓藤五郎等のために欺むかれ其の上播磨源左衛門等の拙なき計に乘られしは是れ所謂惡魔外道に魅られしにて、只だ一旦の瞑まりあり然れども我れ是を諫め其迷ひを晴し奉つりしかば再たび元の名君たり其名君を捨てゝ爾ぞ響敵たる貴殿に對して降參をなすべきや徒づらに口を動かさんよりは早く來つて勝負を決せよ老いたりと雖ども貴殿等親子を對手にして年來鍛えたる我が鎗先を見せ申さんイザや來れと鎗を捻つて身構えたり彷彿に扣えし金子久武細川を初め何れも名を得たる長曾我部の臣○「這は否長なる處の石見の一言我が御主君の御冒葉に從ひ口の横に裂けたればとて飽くまで無禮の口上イデ其の舌の根を引き抜き呉れんと何れも

得物を抑取つて岩見を對手に乘出すを元親馬上に膝を上げ一同を制し元「扨て〳〵健氣なる石見の一言かな斯く斷言いたされし以上は最早此方辨は費さず望みに任して對手にならんと自から馬を乘出せり。

第二十八席

吉良播磨進み出でゝ播「如何にや大將鶏を突くに何ぞ牛の刀を用ゐんや石見の對手は斯申す播磨にて充分なりと相心得候某が彼を討ち取つて御覽に入れん元「オヽ今に初めぬ播磨の勇猛天晴あり然れば其の方罷り出でゝ充分に働らき見せよ播「仰せ心得て候と一鞭を加へ砂煙りを上げて乘り出し播「如何にや德永石見吉良播磨に候あり某しお對手仕つり申さん石「ウム扨ては汝は吳の黄蓋に倣ひ其の身を打たれながら我が主人をば欺むきしものにてあつたるか我が對手に取つて不足はおしサア來い

来れと馬を乗出を心得たりと播磨に於ても馬を進め互ひに秘術を盡して爭そひける内徳永岩見の家來達に於てはソレ主人を討たするな後れるおといつて各々長曾我部方に對して面も振らず打つて入る双方討死をするもの夥だしく其の中に於て兩人は激しき働らきに及んで居りましたが負げず劣らず勝負何時果べきとも見えざりける此とき播磨鉢を引いて　播「如何に石見御邊の受けたる傷口より血汐の烈しく出づるに依つて戦かひ悪う候らはん其の虚に乗じて討つが如き卑怯のものには候はぬ只た今の内手當をいたせ改めて勝負いたさんと承まはつたる石見ニッコリ打笑ひ　石「敵あがらも優しき一言去りとて最早支度を改むる場合にもあらず御邊如き處の天晴の勇士に首討たれんよりこの上もなき譽れに候早く我が首を刎ね給へとて鉢をガラリと投下り大地にドッカと座を構へ首を差延べてあつたる處ろへ、パッ〳〵〳〵と馬を飛して元親來り是亦馬より飛下り　元「扨々健氣なる德永石見斯くなりし上からは最早以前の志ざしを翻へし降參をいたされざるや　石「アイヤ仮令何ほど仰せられると雖ども決して降參の儀は思ひも寄らぬ願はくば我が首を刎ねたまへ　元「如何にも左様相成るからは再び言葉を開き申さぬ此の上からは快よく切腹を遂けられて然るべくまた頼みの用事あらば如何なることにても承まはり候らはん　石「ハヽッ花も實もある只今のお言葉石見忝じけなく存ぜる併し勇士戦場に乗り出す上は命はかねてなきものと相心得候依つて此の上女々しき遺言などは仕まつらぬ切腹をお許し賜はるからは此の上もおきおとに候　元「ウム然らば心靜かに切腹を遂げ王へ、介錯には斯く申する元親自身いたすでござらう其の首級は貴殿奥方へ對して御送り申べし　石「ハヽッ御禮は言

うへ

葉に尽されを、何に分にも宜しくお計らひの儀を願ひ奉まつる、然まち石見は兜を脱ぎ捨て鎧の上帯を取り仮はらへ心静かに差し置かれ差添の鞘を抜ひ腹帯を取つて剣を巻き諸肌を寛ろげ左りの脇腹へグザと突き立て右の脇腹まで一文字に引き逐す剣を以つて咽喉の笛切つたる有様聊かもわるびれも流石は一国の老臣と各々其のふるまひに感涙を催ほしたり大将元親後ろへ廻り一刀の鞘を抜ひ一聲叫んで打下ろしたる剣の下に石見の首は前に落ちたり。

第二十九段

老臣斯の如きゆゑ三好の同勢多く戦死を遂げ心底したる者は逃退かんといたし流れ矢流れ弾に中り或は生捕にありし者も少なからず其内に山内図書は大勢のために高手小手に縛しめに遇ひ其所へ引据ゑられ大山五郎も是亦生捕になり引立てられて両人

大地に頭を下げ赤面おして頭を上げることも能はず此の時元親進み出で　元「如何に両人其方主人は石見の忠義に依つて危うきを逃れて引上げ石見は斯の如く武士の法を立つて予が切腹を申し附たり其方共は何が故に討死も致さず斯くかめ〳〵と生捕になつて来りしぞや　図「仰せには候へども我々両人逐拙なくして斯く生捕となりしが此上は志ざしを改め君へ對して忠勤を抽んで申し候らはん願はくば我々両人の一命を助け玉ひ御家臣の内に加へ下さるやう　元「默れ汝如きの果放の小人百萬人ありと雖ども何の役にも相立ん高卒は得易し一將は得難し其方等のありしゆゑに主家は將に断絶いたさんとす前車の覆へるを見て後車の戒しめとおす汝の降参を許さば必ら主家に害をなさん併し其方等の在りしゆゑに此度我が計略も中りしゆゑ打首にいたすも不憫の至り切腹を申附ける快よく此所に於て切腹仕つれ　図

ハヽヲ、然ればさうあつても助命下さる譯には相成りませんか如何にも許し難しといはれて兩人顏を見合せ案に相違のいたせし樣子最前石見を元親が樣々に辨を盡して助命をいたさんと心得しが潔ぎよく切腹を遂げたるに此兩人飽まで一命を助からんと卑怯の擧動をおし同じ家來でありながら斯の如く相違あるは如何あることならんと各々顏を見合せ笑ひを耐ゑて果は如何なすかと見詰て居りまするとと元親兩人の繩を解かれ早く介錯いたして遣はせソレ切腹をしろと差出したる劍兩人これを取上げ左も恨めし氣に眺めて居りしが

圖「此上は是非に及ばず切腹いたし候はんと劍を抜くよと見るたりしがヌックとばかり立上が被り

圖「恨み面なる元親親子冥土の道連れ覺悟をしろと一刀を振ろく氣色もあく劍の下を掻潛り双方均しく利腕を健たかに打

たれたゆゑ思はぬガラリト刀を夫へ取落を遣は殘念と大手を廣げて武者振附くを金子傳兵衛飛掛り物をもいはず圖書の首を其の處へ打落も久武藏内介は五郎を一刀の下に切つて落せば血煙り立つて其處へ横たはつたり元親カラ〳〵と打笑ひ

元「鼠却つて猫を噛むとは此奴等のことを云ひしならん、アヽ不憫お兩人の志ざし、アハヽヽヽと打笑ひ是より石見の死骸は充分に手當をして一ノ宮へ差送りました圖書五郎兩人の首も塩漬にいたして同じく一ノ宮へ差送る存保是を受取り石見の妻子へお引渡しになり叮寧にいたしました聞く人涙を流さざる者もなく圖書五郎の二ツの首は國を賣る奸賊とあつて桑木に曝され其の上西人の妻子は門前拂ひにいたし早速に夫より籠城をおし當國富國の城主細川左馬頭實之方へ加勢の儀を申し送られました扨此方は元親親子勇氣日頃に百倍し一ノ宮を踏んで取詰めるといふ這

は後席に委しく辯んる事にいたします。

第三十席

城内にては大將存保討殘されたる家の子郎黨に下知を傳へ籠城に及びました寄手の勝誇つたる勇氣宛然破竹の如くにて十重二十重に取包み朝駈け夜討と樣々に手術を盡して一日も早く攻落さんと押掛つて參りまする然れども城兵必死になり籠城に及びました一寸申そと大層結構な城へ三千人ばかりの軍勢で櫓流つたることゆゑ容易に破れないやうな譯でございまそが中々苦しいもので講釋師などは晦日になると船く籠城をいたしまするが此の籠城の顯末なること寄手は雲霞の如くに取結め來り夫も尋常では往かんといふので執達吏とか打奪りとかいふ先生を向けられる其の時には否やでも應でも白旗を掲がへして降參をなし何かと示談を整のへおければならんといふやうな場

合に立至りまする我々は二日の籠城すら中々骨が折れまする然るに全たくの武士でございまするから無暗に降參は出來ざうかといつて應援を頼みしが未だ細川左馬頭は出張をいたして奥れも動もすれば敵のために乘込まれんといたも有樣なれば一時牢時の油斷もなく最とも嚴重に固めて居りまする茲に先運て主人の危うきを救つて切腹を遂げました德永石見の長男同姓源之丞當年三十一才志慮分別があります之する人でございまするか父が最期の其の時は病氣のために乘出をゐともあらざる此度は君又御籠城を遊ばされ敵勢雲霞の如くに取詰め來るの趣むきを承まこれども何分にも病氣のために身体自由あらざるを歎き居りまそる處へ

○「申上げます」源「オヽ誰かと思ふたら奥ではないか奥「ハイ、源「何の用あつて參られた」奥「左樣でございます貴所へ對してお願があつて罷り出でました」源「何の用であるか」奥「外

でばゝしいませんが殿様初め御一同日々の職かひに御尊体もお疲らせ遊ばし妾が男子であらば疾にも能り出でゝ一方の防ぎをもいたすべき處女子の悲しさに出づるあともならず妹抔とても其の通り申して居りまそる　源「ウム頼母しい心である武士に連れ添うものは其の心がふうてはあらず御身の一言聞けば抛ち捨ておもとも赤面の至りぢや病氣のため斯の如き一間に籠り只々心を痛むるのみ如何ある因果にて斯く御病に取附かれしかと我が身を恨んで居る處で　奥「御尤ともでございまそ其の御心をお察し申しまそるゆゑ哀れ願はくば妾に對しお暇を賜はりたく　源「ウム其の方は何で暇を申し受けたいといふか　奥「ハイ餘の儀ではございませんお暇を頂たい折柄には夜に紛れて敵陣に乘込み一命を抛うつて幾分か君の御役にも相立んと心得まする　源「扨々健氣なる一言容ばしく存ずるヤテ又夫に來りしは和ではな

いか　和「ハイお兄い様妾しでございまそと進んで參つたは源之丞の妹お和當年取つて十八才花を欺むき月を羞らうといふ天然供はる美婦人優やかに兩手を仕かへ　和「只今姉上様より願ひ上げましたる通り妾もどうかお暇を賜はりまして敵陣に能り越し一命を抛うち萬分ケ一お上に對して御恩報じをいたしたく存じまそる　源「ウム其の志さし恐服をいたそ其方等左迄に心を籠めたるかれば斯く申する源之丞改めて汝等兩人に頼みがある……

第三十一席

承まはつたる妾のおさと妹のお和と共に膝を進めて　さと「有難きお言葉頼みがあるとは如何なる事にございますするか前にも申した通り妾共にて出來得とにございますれば仮令火の中水の中に入るとても更に厭ひはいたしません　源「ウム左様か然らば申し入れるが餘の儀ではおいい汝等兩人の一命を予が申受けんと相

心得る　さと「ハイ一命が御用とあらば何日何時たりとも差支へはございませんお召し遊ばしませ　源「左様か聊か談ずる次第もあり是へ參れと手許へ引附け妻の耳に口を寄せ是々斯様〳〵と何かヒソ〳〵囁やきしが　さと「ハイ左様なれば是なるお和殿に從がつて其の計畧の行なはれるとあれば誠にお喜しう存じまをとお和にも其の次第を語り　さと「如何にも承知いたしまし　存「如何に源之丞汝病出でましたる源之丞は夫より君の御前へ出で改めてお目通りをしたと二人はニッコリ笑を含み互ひに何か打合せ其の場を罷り出でました源之丞は夫より君の御前へ出で改めてお目通りを願ひ御機嫌を伺がひし處存保是に向つて　存「如何に源之丞汝病氣にて予も殘念に相心得る過日は其方父の諫めを用いず不覺を取つて御名を蒙むりしが高死の内に一生を得しは汝が父の忠勤に據る所世が世であらば其方へ莫大の恩賞を與ふべき處なれども今斯のごとくの不運にむちゐり其方に對して手當も出來ぬ怠

あき主人と思ふであらうが許して呉れよ　源「仰せ添じけかく候微臣が父聊か忠義を盡したりとて左まで御賞美に與かり候は過分の至りに候拙者病氣を胃てし罷り出でたるは聊か言上致したきことの有之何卒御人拂ひを願ひたく　存「ハヽ左様である　源「恐れながら改めてかコレ遠慮いたせハッと答へて御家來方其席を罷り退るお差向ひに相成つたる時に進み出でたる源之丞　源「恐れながら改めて言上仕つる　存「何ぢや　源「餘の儀にも候はず斯の如く敵勢の七重八重と押取包み細川氏の援兵は未だ來らず……　存「然れば細川の加勢の未だ來らざるに依つて予は近日乘出し敵の同勢に打つて入り叶はざる折柄には武士の本分を盡し討死をいたすの覺悟であるされども只不憫あるは我れを初め家來一同の妻子のことは源「有難きお言葉其の事未少しく早くお心附きに相成つたらば今日如き不覺の名前はお取り遊ばされざるものを今更斯様のことを申

上げるは詮なきことあれば過ぎたるとを申さず只茲に拙者一ッの計畧こそ候幸はひにお用ひ下されば有難き仕合せに存ずる

存「何ぢやいふて見ろ　源「然れば此所に於て一度御降參を遊ばせ存「ナニ大勢の家來を討たれたる敵に何とて降參をおそべき只々一命を貰ぼる存保と心得居るか　源「イヤ死は一旦にして易く生は萬代にして得難し一旦御降參遊ばそのも一ッの計畧　存「ソテ其の計畧といふは　源「然れば敵將元親の忰孫太郎未だ無妻を幸はひに云々斯樣にいたしては如何に侯やと何か計畧を言上いたしたる處存保片頬に笑を含み　存「左樣わらば直盛であるが不憫あるは汝が妻妹　源「イヤ仰せには候へ共彼等が一命を拋つが爲に事充分に相成り候らはゞ草葉の陰に能りある父も定めし喜び候らはん何卒御用ゐ賜はるやう　存「然らば宜さに計らうて庇れるらうにと流石の存保も頭を傾け暫し考へて居られました。

第三十二席

然るに翌日長曾我部の先陣吉良、細川、金子久武等の人々己に兵船の用意に及び太鼓を打ちエイ〳〵と聲を上げて城の大手を望んで取詰めて參り櫓の上を見てあれば道は开も如何に朝風に飜へつたる白き旗域中は鉞まり返つて居りまそる樣子先手の物頭より　○「恐れながら申上げます、播磨馬上にあつて　播「何事だ　○「御覽遊ばせ敵城櫓に白旗を立て候は叶はざるみと〻心得今更降參をいたす事と相見えまする　播「ウム左樣であるか敵の同勢降參をいたすとわらば暫らく惣攻は相留まり本陣へ對して此段を申上げるやういたせ　○「ハッと心得て其の者は退ぞく、吉良播磨より相勝の方々へ對して其の趣むきを申入れ相談の上此のとを本陣へ對し申述りまする承まはつたる元親父子陣頭に馬を進めて見れば櫓の上に於て白き旗を頻りに動かして居りまする背

も今も白い旗を押立つれば鉄砲の印しといふとは今更申もまでもなし元親播磨を呼んで下知を傳へ、二三丁といふもの陣を繰引にいたし相待つて居りまを處へ城内より乘出して參つたる一人の武士酒莚を着用して、五六人の家來体のものを從かへ竹に狹みし何やら書附を高く差上げ此方を望んで參りしが頓て吉良播磨の陣頭へ參りました、播磨の先手の人々左右よりパラ〳〵ッと進み出で○「其の方は何者である　源「ハヽヽ拙者儀は三好修理之進存保の臣德永源之丞と申するものに候、願はくは御先手木勝に拜顏をいたしたく宜しく御取次の儀を願ひまする　○「左様でござるか暫らく待つしやるやうに　源「委細承知いたしました其の所へ着座をいたし播磨へ此の事を申入れると　播「此方へ通すやうにとあつたるゆゑ再たび夫へ來つて　○「御案内をいたもから此方へ參るやうに　源「委細承知いたしたと案内に連れて參り

ますると大將播磨は正面の床几に腰を打掛け金子傳兵衛、細川源左衛門久武宮内何れも床几を並べて扣えまする源之丞夫へ來つて兩手を仕きハッと平伏をいたも此の時分はらより姓名を披露いたしまそると吉良播磨　播「御身は源之丞と申するか拙者儀は當家の老臣吉良播磨である見知り置かれるやうと夫より相大將各々姓名を名乘り先づ床几へ掛り玉へと家來に申附け源之丞へ床几を遣はしました　源「御免を蒙むると床几に腰を打掛け　源「扨某がし推參をいたしたるは餘の儀にも候らはず拙者主人存保儘かの事よりして當家と確執を生じ永らくの間取かいをいたし候へども皆之奸臣山内圖書大山五郎等の言葉を用ひ玉ひしが誤まり今更御後悔遊はされ哀れ願はくば御相談の儀を御許し玉はるや……此の時播磨は　播「アイヤ暫らく待たれよ相談とは何事でござるいふまでもなく和談といふは未だ戰かひの勝敗決せざ

る前の事、今三好氏に於ては戰かひの度毎に破れを取り既に落城も近きし相成つたり然るに今更らに至り和談とは何事なるや殊に先刻降參の印しに白旗まで出せしにあらずや然れば潔ぎよく降參をいたして一命を全たうすべし　源「イヤお言葉には候らへども強がち主人は一命を惜みて新く申するにあらず只々主人の妻子家來一同の妻子共を哀れむ處より、拙者を以つて右の儀を申し入れ候其の邊を宜しく御酌量遊ばされお取計らいの程を願いたく存ぜる……

第三十三席

播「成程併し某かしの一存にも參らざることゆゑ上へ言上をいたしたる上追附け返答をいたすためにすであらうッテ是なる書狀は何等の持參せられたか　源「然れば御聞き濟み賜はらば此の書狀に認ためたる如く相守るもとに仕つるでござらうと差出したる

を播磨受取り　播「何は然れ此方預かり設き申を今日はお引取りあつて然るべし　源「委細承知いたしました　播「貴殿でござるか過日切腹をなされた石見殿の御子息は　源「左樣にでございます扨々父といひ御子息といひ天晴なる忠臣播殿感服いたしてござると茲に別れを告げて觀之丞一度城内へ退き扨本陣に於ては源之丞の持參いたしたる彼の書附を押開いて見れば和談書といふ物で此度敗軍をいたしたために就ては長曾我部より相應のことを申いづれは決して違背いたさんといふ天地に誓たる處の印形の据たる書面でございまを元親父子初め老臣一同さま〳〵評議をいたしたる處若手の武士は九分九厘勝利を得たることゆゑ此の盧に乘じて一刻も早く此の城を乘取り三好の領地を悉くとく君の領地にいたし奉つらんと申しますのを、播磨を初め老臣方は先方斯の如く謹しんで降參的の和議を申込んで參つたによつて是を

許し又今爭うて我が側近にいたるといふことを致さず仁德を施こしたるこそ却つて宜しからんと暫らくの間評論を戰かはして居りましたが先刻より承まはつて居つたる元親言葉を發し元「扨一同最前より我れ此所に於て承まはりしが播磨の申そる所至極穩やかに存ずる今に至つては假令後進背をいたそとも當城を踏破らんに難き事やあらん然れば先方の乞に任して一旦は許して道はす事をいたそであらう此上戰かひ永びくやうお塙合になれば兵粮彈藥も大きに手間に相成るゆえ、今穩やかに先方の乞を許そこそ至極宜しからんと前後を考へたる元親の言葉一同恐れ入り仰せ御尤もの至りに候と申上げた處に因つて評議一決致し城内へ對して矢文を射込まれましたから開いて見ると徳永源之丞へ前日の件に就て申入れたることあるに依つて速やかに罷り出でろといふ

こと源之丞是に對して披露に及び已れ一人にて此の大役を勤むるも恐れ多し外一人に仰せ附けられたしとあつて眞田三郎兵衛と いふものに申附けられ兩人同道にて吉良播磨の陣中へ參りましたソコで播磨の案内に從がひ本陣へ參りまもると長曾我部の勇士何れも兜の星を輝かし嚴しく和えて居りまする中にも大將親子は正面に扣えたる有樣威風凜々として四邊を拂うばかり茲て改めて熟談を遂げたる處つまり元親の申すには領分半を裂いて此方に差出そやうに其の上以來此方幕下に相成つて忠勤を抽んでるやうにといふことでございます、源之丞三郎兵衛の兩人兩人「領分半を裂いて献つるみとは委細承知いたしましたが只今に至り貴殿の幕下になるといふは誠に主人が京都の本家を初め一族に對し一存にていたす譯にも相成らず依つて速やかに御返答いたそ事叶ひ申さずといふ種々談判の末元親に於ても源之丞

の忠勤に愛で署ぼ協議は茲に纏まり何れ改めて存保に面會の上にて誓紙血判をいたす赴むきを申し入れて兩人は引取りました

第三十四席

夫より彼是一兩日相經ちまする處へ乘出して參つたのは富岡の城主細川右馬頭實之三好の危急を救はんとて同勢すぐつて五千餘人整々堂々と旗を押立て一の宮を望んで乘込み來り殆んと二里ばかり隔つたる上河原といふ所へ備え立をいたしました段々樣子をお尋ねにあると一ノ宮に於ては降參体の和談にあつたといふことを承まはり齒噬をいたして大いに怒り右扨も卑怯なる存保の有樣我れ願みに應じて此の所に乘出し近頃憂とする元親親子を目に物見せんと心得し處降參体の和談を致すとは實に武士の風上にも置き難き擧動唇滅びて齒寒し此の虚に乘じて彼必ず

我が富岡をも攻めんの心得なるべし此上ぬ如何にいたしたものであらうと老臣を招き評議をいたしましたる處、細川の老臣堀田主計といふ者進み出て　主「恐れながら拙者愚案を仕つるに何か是には意味ありげに心得候存保とても君に御加勢を願ひ一言の斷はりもなく斯くいたすは何か仔細あくつては叶はざることなるが密かに長曾我部の圖みを払け一ノ宮の城中へ乘込み樣子を承はり候らはん何卒此の儀御許し王はりたく　右其方の申する擧尤ともの至りなれども其方身の上に間違ひのありし折柄には當家の大事　主「イヤお言葉には候へ其某がし辨を飾り押通らんに何の難きことのあるべき君より御許しを蒙むり手勢の中より心利きたる者二十人ほどを從がへ長曾我部の陣を望んで乘込み來り忽ち此の趣きを申し入れる長曾我部方に於ては細川右馬頭乘出せしと承まはり其の手配りをいたさんとて伜孫太郎

を大將として軍勢三千餘人を卒き充分に手配りをいたして居りまする處へ細川の臣堀田主計來りし趣むき早速此の儀を盛親に申し入れると盛親承まはつて面會をいたしました此の時に主計は一通りの挨拶畢り　主「扨某がし在り越したるは餘の儀にあらず親戚三好よりして援兵の儀を申し送りしに依り主人其の望みに應じ罷り越したる處只今御當家へ相願ひ和談の儀整のひし儀を承まはり寛之殊の外喜ぶび就ては此の後心得違ゐあらざるやう一言存保へ親類の好誼を以つて申し入れ其の上此方に於ても願はくば貴下と御別懇の儀を願はんと存じ能か參り候宜しく城中へお通しあらんとを願う　盛「イヤ御尤ともの一言流石細川の名家、右馬頭殿の御心底、盛親感服いたす武士の好誼を以つて御通し申も速やかにお通りあさるやう　主「通し添じけなき御言葉何分宜しくお計らひを願ひ奉つると許しを乞むり諸陣を通り抜け

一ノ宮の城門の所へ來り細川の使者ある起むきを申入れる城兵殊の外喜こび早速此の段を主人に申入れ開門をいたす案内に通れて罷て通りたる堀田主計正面に扣えたる三好存保に對し慇懃に禮を述べる存保親子の喜こびは一方ならず　主「恐れながら此度主人實之出兵延引なしたるが敢て長曾我部の勢に臆したるにあらず充分に準備をいたし進軍に及びたるが爲めに大きに遲刻に及び候宜しく御賢察あらんことを願う　存「イヤ主計遠路の所能く出兵いたされし段添じけなく存ずる去りながら只今の所程束なく相心得實は是々に付らつてござると和談の趣意を述べられたる時に、主計頭を上げて保存の顔をシケ〳〵と眺めて居りました。

第三十五席

主「扨々お情けなき所の御心底今暫らく御籠城に相成つたる折に

は此方充分に苦身仕つり前後より引挟んで討ち申さんものを去りとて斯く相成りし上からは十万言を費やすと雖ども何の益かは候らはん此儀にて手前は引取り候又石見の怜源之丞其方儀はらにありながら何とて言甲斐なき扱かひをいたされしぞと怨みがましく述べられしに源之丞膝を進め　源「仰せ至極御尤どもの至りに候我れ貴殿に對し聊か願ひ奉つることの有之り宜しく御計らひ給ふべし　主「如何なる事あるか此場に至つて主計何をか行ふことの出来得べき　源「イヤ〳〵左にあらず願はくば君御人拂らひの儀を願ひ奉つる　存「ウム一同遠慮いたせとあつて家來を悉ごとく遠ざけられ三人膝を交へ私かに協議いたされた主計當城を立出で我が主人の陣中へ歸り何か實之に言上をいたし改めて長曾我部の方へ對し斯く相成し上からは實之に於ても御當家と相和睦し互ひに堅き約束をして共々に計畧をいたした

く存ずる願はくば此儀御聞濟み玉はりたしと申入れました元親父子一同の老臣と評議の上國より此方に於ては望む所なりと早速に協議まりしが各々一ノ宮の大手前に於て面會を遂げられました是れは存保の精神を試され又實之の擧動を長曾我部が見やうといふのでございまそ長曾我部の老臣方は笑の内に刀を含むといふ時節のあるべからざるといつて屈強なる兵士三十人餘り前後を警衛して參りたる處、案に相違し存保は僅かに十二三人を從かへ細川實之堀田主計を初め其外二十人ばかりを從かへられ賊に叮嚀ある挨拶に盃の取交せをいたし時に元親　元「斯く醫ひし以上は存保に於ては固より我れに對し乃向ふの心底はでさるまいか軍鄙の慣ひあれば人質を差出すやうにと盛親諸共に申し入れる存保承まはり　存「尤どもの至りに候我が娘和姫と申そる者人質として差出し申す是に拙者の二男あ

らざる事を御承知相成りたし元親頭を傾むけてあつたる時嬉男盛親進み出で　盛「イヤ女子にては人質とは申し難し願はくば男子を出さるやうに人質に女子を出せといふは何か意味ありけに心得る此時源之丞進み出で　源「盛親殿のお言葉至極御尤ともに候去りながら主人存保悴幸之助儀は大病にして物の役に相立たず左様なる者を人質として出せは却つて二心あるべしとの疑かひを蒙むらんとて最愛なる處の和姫を差出さる次第宜しく御賢慮給はるべし　盛「ウム然らば男子の身体不自由なるが爲めに出さゞるといはれるか如何さも尤ともの至り左あらば夫れにて宜しからんと盛親承知いたしましたから右馬頭に於ても更に異存なしとわつて互ひに書附を取交し其の日は別れ翌日にあり改めて綺羅美やかなる興物に打乗せ周圍を取卷き十人餘りの婦人何れも今日を晴と粧はひ源之丞が案内をして元親の陣中へ通り

興物を下ろし立出てられたるを人々如何なる所の婦人かとみてあれば色飽までも白くしく殘んの雪を欺むくばかり眼元涼しくして黒目は漆を以つて點を打ちたるが如く眉は房々として鼻筋通り口許の愛嬌溢るゝばかり髪は烏の濡羽色其の艶々として居りまするよと得もいはれざる絶世の美人一度笑めば如何なる英雄豪傑も恍惚として魂を天外に飛ばさんばかり殊に美々しく粧はひたるあれば其の風情も又別段左も恥かし氣に老女に手を引かれ數多の女中を從かへ進み來りし有様口善悪おき兵士等も我れを忘れて言葉を漏し扨も世の中に鮮やかなる美人のあるものかな唐土の楊貴妃、我朝の通衣、小町も斯までにはあらざりしか各々呆れて居りましたが此婦人こそ全たく存保の娘にあらぬ源之丞の妹にて優しき内に雄々しき心のある天晴女丈夫、老女といふは源之丞の全たく奥方にて是より如何なる事を仕出さか開

は次回に譲じます。

第三十六席

優勝劣敗は昔しも今も更に變りはございません文明とか博愛とかいうことを常に口にする西洋各國でも已れの部合上に依つては口に公明正大を唱へ強きを挫ばらにいたすといふが人情總て戰かひといふものは申すまでもございませんが勝つたる人が充分の事をいひ出し敗れたる者は先方の申すに從がはんければ家國を滅ぼそといふ憂ひが眼前にありまそに依つて大体のことは忍んで是に應じまする三好は固より門閥長曾我部は以前は兎もあれ是近來郷民の家より起りし者なれば兎角に三好では輕んじて居りましたる處見苦しき敗軍を取り人質までも先方に送り其上如何なる難題を申して參らんも知れぬと君臣共に心を痛め別けて老臣德永源之丞は君を諫め只今は成べく先方の申すに從かひ

只々時機の來るを待つて懐薪の恥辱を雪ぎ玉へと計略を献せられたる處長曾我部の臣熊谷四郎左衛門を以つて申し送りたるに是は此度和談になり候に就ては向後の爲め充分に協議をいたしたく相心得候に依り御苦勞ながら然るべき御家臣を高知へ對して御出での儀を願うといふ赴むきを申し入れましたソコで老臣評議の上德永源之丞小山九郎左衛門の兩人を以つて總ての媾和の事に就き高知へ對して遣はしました所城内本丸に案内をいたし大將元親父子は老臣大勢を從がへて其所へ出で一通りの挨拶畢りし時に元「扨北方等兩人主人存保名代として參りたる以上は存保と心得此方より協議いたそが差支はあるまいか源「ハヽッ身不肖ながら我々兩人主人存保の代理仕まつり如何ある事にて候か承まはらん確と御答へ申上げ候元「然れば此度和談の印しといたし三好の本城德嶋を此方に長く讓られて然るべく此儀豊

不承知は申されまい　源「恐れながら源之丞申上げまする彼所は主人祖先より傳へられたる大切の所に候間、願はくば岩城を以つて彼の地に替へられたく此段宜しく御聞濟みあらん事を願ひまする殊に申上げるまでゝも候はず德嶋の儀を堤一ッを隔て細川家領分に接し居り候に依つて彼是苦情の出でたる時面倒に立至らんも計り難く　元「イヤ〳〵其の儀に此方に於て熊く必得て居る所細川が如何やうに申をかは知らずと雖ども三好の領分に相違あらざるに依つて此方申し受くるに何ぞ仔細の候らはん強て此所を此方へ譲らんとあるあらば己むを得ず和談も是までにいたすに依つて左樣存せられるやう此の時小山九郎左衛門進み出で　九「恐れながら一通り御尤ともの至りには候得共、只今源之丞が申し上げたる通り何分にも岩城とは遠ひ德嶋は人氣至つて惡く動もすれば御手に乘らざるやうあるゝと出來いたし候時には

却て御當家の御爲めにも相成るまじと存ぜるはれるか九郎左衛門三好殿は逆攻いたすに依つて民是を悲むと雖ども我等は決して左にあらず民と共に苦樂を同じういたし如何ある所ありと雖ども治むるに難きことのあらんとて何を申しても元親か承知いたしませんその日は暇を告げて旅宿へ立歸りました。

第三十七席

扨兩人は旅宿へ立歸りまして密かに相談を遂げて　九「扨德永容易あらん大事出來いたしたではござらんか、元親殿斯ばかり重大の仰せ出しに相成るまじと必得て居つたる處、彼の地を長曾我部に差出せといふことは我々兩人の計らひでは迚も叶はん輕々しく承知いたしなば如何やうなる御不興を蒙むるやも知れず一度一ノ宮へ立歸り君へ言上いたした上御下知を受ける方宜しからん

源之丞頭を傾むけて居りしが

源イヤ〳〵決して疑ふに足らぬ我々君よりして總てのことを宜しく取計らへといふの仰せを蒙むつて參りしに依つて彼の地を過はしたところが仔細ない貴殿の申す通り彼所へ元親殿乘出して如何に仁政を施こさんとも雖ども民容易に屈服いたす氣支ひない、シテ見れば鬼はひ却つて結局は御主人の手に取返すやうなことに至らんと拙者は心得る

九イヤ〳〵左にあらず是れは全の重大事件貴殿は兎角に長曾我部のゐとに就ては如何やうなるとをもお受をそるの必得で居るが某がしは左にあらず其上御親類細川家へ對しても一通り申上げず此儘に引渡して後日細川家より長曾我部には申されぬとも此方主人へ對して難題を申し掛け來り御領分をば讓り玉へかどいはれし折柄には殘念ながら只今の處では細川家へ對して弓を彈くゐとは迚も行くまいと心得る兵は疲れ金銀兵糧を失ゐ

ひたる今日ゆゑ遂に主家は長曾我部細川のために餌地を奪はれ御家を全たうすること能はざるやうに立至らん然る時に至らば我々何を以つて上へ對して申譯いたさん

源夫は貴殿の杞憂過ぎたり我れは左にあらず此方より細川家へ對し長曾我部は云々と申し一旦斷はりしも更に承知いたさず己むを得ぬ承知いたしたりと申せば細川家に於ても豈指を咬へ手を束ねて居る氣支ひはござるまいいふまでもなく僅か隔つたる領分境必ら干戈を交ゆるの場合に至らん兩虎爭さふときは一虎は傷つき一虎は死す双方疲れしその時に不意に起つて我君怨敵長曾我部を押片附其時に至りては趣儀に依らば細川勢をば押倒し終に兩國は皆我君の手に入るやうな事に立至らん然らば君家の萬歳この上もなきとではござらんか

九夫はいふと易くして行なうこと難し貴殿は動もすれば己れより發明なるものは世の中にないやうに思

はれるが大きに違ふ　源「這は無禮の一言であらう、小山荷しくも某がしは君の台命を蒙むりし正使なり貴殿の副使に候はゞ然るに某がしの申さるゝことを從はざるのみならず無禮の一言を發するは甚だ奇怪なり　九「イヤ某し副使なりと雖も眼前主家の綸ひとなるべき事を何とて此儘手を束ねて居られんや正使副使の違ひはあれど同じ役目を繋つて來たりし者なり然るに只御身にのみ任せ置く時は此方の役目が相立たずと威猛高にあり九郎左衛門顏色を變へてヂリ〳〵ッと進みたる有樣を見て家來共はさぞ〳〵に兩人を宥め一時は漸やく治まりしが九郎左衛門の只副使〳〵といはれて己れがあつておきが如くにいたす德永の擧動あそ心惜しとて其の翌日よりは所勞に冒されし赴むきを以つて元親の前へ出ず源之丞は固より已れが計略を以て君家を恢復いたさうといふ一已の英雄でございまするから更に遠慮もなく綿和談

判は德嶋を長曾我部に讓ることにして首尾能く纏まりを附けました。

第三十八席

元親に於ては源之丞の凡あらざる体を御覽にあり殊の外御賞美あつて度々お召しにあり有難き御言葉を賜はり御酒を下し設かれ肥えたる馬一匹美麗なる太刀一腰を引出物として下し置かれ上々の首尾にて双方共決しく此の後に至り犯そべからざるといふ誓紙血判をいたしました扨小山は段々樣子を窺がうに源之丞は上首尾にて今日も御殿へお召しになり御酒を下し賜かれ太刀馬等を賜はりしといふ事を承まはり心中燃えるが如くに思ひ其上表向き君の御娘と披露いたしたる和姫老女里村といへる我が女房に私かに面會をいたし樣々の話しなどをいたしたることを聞き一人切齒をなし實に彼は憎くき奴あり今元親勢ひの宣きに依り

大方彼に媚諂らひ我が妹を孫太郎盛親にでも嫁合せ間宜くば已れ主人の寝首でも搔かんの心底に相違あるまいと疑心暗鬼を生じ同じ旅宿に居あがらも其後は物をもいはず間毎を隔つた座敷とはいひながら夫にあく腹臣の者に申し附け密かに挙動を探らすれば彼は憂ふる色もなく或時は酩酊おし我が座敷に於て家來共に對して暴逆無人の挙動なきもいたすする由愈よ夫に極まつたりと密かに密面を認ため腹臣山田一郎といふものに申附け國表へ一歩先へ出立をさせ老臣前田縫之助へ對して密かに右の由を申入れました源之亜は敵に飼られし体に見せかけ却つて反間若肉の計略を行ひはんと專ばら苦心をいたし表で笑へど心中の苦心は一方あらず北内に愈よ用も濟み御暇乞を申し上げ土佐國高知を出立いたす病氣の披落をいたせし小山九郎左衛門も同じく暇乞をして出立いたしましたが總て偽永は上々の首尾で小山は

不首尾でございます。國表へ歸るの途中旅館の奥座敷に於て九郎左衛門に向つて　源　扨小山定めし貴殿に於ても御心配でございッたらうが不充分ながらも斯々の事が繼ました此上からは豫て申談せし通り細川家へ對して一通り拙者御斷はりを申上げやうと心得るが表立つて參れば長曾我部の疑念をも惹起し爲宜しからざるやうに存ずる夫に就て如何でござるか其許拙者を一人此の所よりして富岡へ對してお道はし下さるか某がし名代には家來永山伊三郎を某がしのやうにいたして儀論をいたさせたく存ぜる　九　イヤ其儀は決して相成り申さん如何に貴殿が偽はるとも雖ども君公よりして仰せ聞のあらざるとをば某がし知らざれば兎に角辨まへたる以上は何と申しても相成り申さんと種々に說くと雖ども小山が承知をいたさゝるに依り源之丞已むを得ず一ノ宮へ對して日數を經て立戻りまして翌日九郎左衛門議共に殿

の御前へ罷出て平伏をいたせば正面には存保左右に家老前田縫之助を初め一同扣えて居りまする兩人より縫一言上に及びし時存保目に角を立て源之丞をハッタと睨み　存「如何に源之丞其方儀此度高知に於て副使九郎左衛門と孫々協議もいたさず一存を以て萬事取計らひをいたせし段我れを蔑しろにいたし同役をあつてなきが如くに扱かひを致せしと甚だ以て奇怪の至り汝は左までの奴とは心得ざりしが偖くき所の致し方と以ての外の憤はり御賞美にこそ與かれ御咎めあるを受くべき覺えサラ〳〵あらざるやうに心得たる德永源之丞主人の言葉に打驚ろきッッと前へ進み出でました。

第三十、九席

源「恐れながら上は如何なる思召しにて存せられ候や某かし重代の君家に對し奉ぞ不忠を働らき申すべし決して御ためを思ひ惡しき儀は

いたさざる心得　存「イヤ〳〵汝言葉を巧みに辯ずるとも其の言譯相立たぬキッと覺命いたすべきにあれども父の功名とひい尾は其の方儀に附充分取調ぶる廉あるによつて今日の所は差許し遣はし當分出仕無用であると荒かくしき一言　源「是はシタリと進んで物いはんとなしたるを縫之助聲を掛け　縫「さア〳〵源之丞上意である其の方直ちに御答へ申上げるは無禮あるぞ扣え居れと嚴しき言葉己むを得ずしてスコ〳〵と引退り己れの屋敷へ立歸り奥の一間に至つて思はず嘆息を吐き大廈の將に覆へられんとするときは一木の能く是れを支ゆべきにあらず我れ聊さかも君に對して不忠の志ざしなく飽までお家のためを思ひ粉骨細身をいたし斯はかり苦心いたすに扨は九郎左衛門より何か申上げたるとと見える去りながら天は照々として眞を照し給ふに依つて我が忠か不忠かは後日に致つて知れ申さん去りとて此のまゝ

捨置きなば將にお家危うからん如何にいたして宜しきかとさまに心を碎きしが當家出伺を留められしゆゑに空しく無念の歯を食縛つて居りましたる扨此方は元親多の老臣を招き　元「豫々望みたる德島の手に入りし以上は、彼所に對して一刻も早く足掛りの要害をいたさゞれば必ら〻細川より何か申して參るに相違あいさすれば細川とも手切となり一擧にして細川を討ち其の後に三好を押倒し間宜く參れば讃岐國にも立入り四國を併呑といたさんとの我が心底彼如何に舊家なりと雖ども恐るゝに足らずと得々として一同のものに仰せられる老臣一同事の外喜こび何れも萬歳を唱へましたる時に久武宮内當時織部と改名いたしたる老臣是は主人が宮内少輔に任官をいたされたにより宮内では恐入るといふので織部と改名いたしました吉良播磨と比びたる天晴の男士御前へ罷り出でる　織「恐れながら君に對して織

部生涯の願ひこそ候御聞濟み賜はらば誠に有難き仕合せに存ずる　元「ウム織部如何なる儀を申し入れるか苦しうない其の所に於て述べよ　織「ハヽッ有難き仕合せ總て此度御勝利相成りしは申そまでも候らはず若殿盛親殿並いに吉良細川金子等勇士の力最とも充分に勝れてありし處不肖某がしには何の功もなく誠に赤面いたし候、何卒新領地德島の儀は某がしへ對して御任せ下されたく不肖ながら彼の地へ赴むき君の御威光を輝やかし民を慰け申したく御聞濟みの儀を偏に願ひ上げ奉つると思ひ切つて申入れるときに元親ニッコリ笑ひ　元「今に初めぬ事ながら織部汝の申する處予も喜こばしく相心得る其の方とても此度の職かひに數々の功名を致せしに其の功にも誘らず却つて身を卑下し他人の功名を揚げ新領地の民を撫育いたさんと申する狀喜こばしくは存ず委細は汝に任せるであらう宜しきに取計らへ　織「ハ

ッ不肖の某がしに斯ばかりの御賞美を下し置かるゝは身に餘り有難き仕合せに存じ奉つると悲より諸老臣と評議をいたし中内源左衛門を副將として手勢一千人を從がへ鵜島へ對して駆込み來る。

第四十席

處ろへ三好より小山九郎左衛門を出張され双方熟議の上長曾我部の領分といふ事をば改ためて一同の民へ對し申し入れ衛の傍はらに一城を築くことに相成りましたが中々一ケ城を築くといふは容易の事ではございませんの我へもある事ゆゑ分のものへ對し農業等の邪魔にあらんやうに人夫を募り久武中内の兩士自から指圖をいたし追々に普請に取掛つて參りました頃しも天正六年十一月の中旬日は短かく容易に普請出來いたしませんに於ては早出居殘りをさせ賃金を增し已れ傍はらを放れを指圖をいたし漸やく十一月末つかたになつて半以上出來をいたしました然るに細川左馬頭方よりして改ためて使者中村權左衛門宍戸彦右衛門到着の赴むきを申入れる忽ち案内をいたし織部源左衛門の兩人面會をいたせし處細川家の使者のいはれるには「當城に於ては我が主人領分と儘かに隔つて居る處ゆゑ本來一同協議にあるべきに無斷に此所へ城を築き候は近頃穏かならざる擧動此方よりして三好家へ改ためて申入れたる處長曾我部の方へ掛合はれるやうにとの事に付て我々共是へ罷り越したりとのと、織部ニコリ笑ひ「お言葉には候へども拙者主人は三好と熟議の上當所は我が領地にいたせし處あれば細川家の御言葉には從がはず又細川家領分境なれば夫れに對し兎角う申し入れられるは甚はだ嗚呼がましき事と必得る決して貴殿方の御指圖に與かるべきにあらず尤とも某がし方に

於ては事を好み申さぬと雖も貴殿方に於て御不承知あれば如何やうに應對仕まつるべく不肖ながら我々兩人主人元親の眼鏡に依つて當所へ出張いたせし上は決して指だに差さるゝ譯には相成り申さずと殿重の挨拶に中村宍戸の兩人も尚はさまざまに言葉を盡して申し入れしが何ど仰せられても當所は此の方が心任せにいたせとて終に兩名を歸しましたる扨て其の年も經ち翌年正月七草が相濟みまするとまた又々昔請に取掛り正月の末つかたに至つて皆出來をいたしました織部源左衛門の二人は高知へ對し出來の趣むきを申し上げ檢分を願ひし處孫太郎盛親老臣兩三人を從がへ忽ち夫へ乘込み來たり織部源左衛門の案内に從がひ檢分をいたしたる處急造らへとはいひながら流石兩人の細張誠に結構に出來をいたしましたにより殊の外喜こび高知へ立歸り扨又傾分の民は別けて仁政を施こさんければ充分に懷かんものでございまするから總ての事に儉約を思ばらとして成べく費への掛らざるやうに致し町人百姓に對しては親切叮寧に取扱かひをいたして遣はしまするにより今まで三好の家來共が逆政をいたしたる跡なれば町人百姓三人五人集まれば必ら老久武中内の兩人を賞そやして實に結構なる御領主樣である御城代の方々ですら是だに依つて全たくの御殿樣がお出でにおつたら愈よ我々は枕を高くして眠る事が出來やうと一同腹鼓を打つて喜こんで居りました其の一伍一什を高知へ對して申上げしに依つて元親に於ては事の外喜こび孫太郎盛親を以つて又々徳島へ出張申附ける盛親三百人の同勢を從がへ再たび來つて郡奉行に申附け七十有餘になる者をお召出しあり養老の盃を下し置れるの由を御出しました。

何が扨御城主から斯樣な事を申し出されたゆゑ事の外喜こび、

甲「マア驚ろいた事ぢやアねへか御城主樣が皆んなすつてマア御年貢なども許され有難エと思つて居るところへ又今度年老つたものを召出してお盃を下さるといふ斯んな嬉しいことはねへ夫に就て汝が處の爺樣おばは是非出おけりやアなるめエ　乙「ウム出るところぢやアねエ、爺さんも婆さんも喜こんでござッしやる

甲「さうか羨やましい事だ俺が處の父さまなどは殘念なことで六十九だモウ一年のことで出られねへよ　乙「ウム夫は氣の毒の事だどうかそこの處を何とか話し合におらねへものだろうか俺が爺樣は七十三だから其一ッをお前の方に讓るから七十にして出たらどうだらう　甲「そんあとにも往くめエよ何は兎もあれ有難エことだと各自に噂をいたして居ります天正七年五月上己の節旬にお召出しにあるあとに愈よ極まり百姓今日を晴と着飾り玄

父さんの代から傳はつて居るといふ怪しげある袴をはきまもるものあり其の時分には羽織といふものは着けず殺分か心得のあるものは肩衣を着け又中には袴もなく着流しで行く者もございまもるがワロ〳〵御城内を指して參りまもると一の水戸に於て夫れ〳〵捨たゆる者がある切符のやうな物を渡され夫を受取り庭前へ對し荒莚を敷きその上へ御縁の重ねてありまする處の何村々々といふ印しがしてございまもるから各々夫へ來つて扣にて居りまもるを見て、ソレお殿樣がござッたと一同平服いたを　盛扨其方等は此度我が父の領分に加はりし處の者おるか長齊いたしたる段誠に目出度きことにてあると結好おる處のお言葉を賜はり一同有難涙に暮れ各々お盃を賜はり下戸も上戸もおしなべて頂戴をいたし豫て出來置いたる處の御臺に於て猿樂を飾ひまし

たがその頃名譽の者を撰出し一刎飛ばせ附けられ夜分に至れば松火を照し宛然白昼の如く斯様に目出度きみとはあるまじとさて君臣共に酒を廻し村々に於ては篝を焚き、ワイ〳〵といつて祝し合ひました然るに森に一の騒動の出來したといふは細川家の老臣堀田主計殿々入れ置いたる處の囚の者より今日饗老の宴ありと承まはり充分計畧を儲はして今宵俄かに夜討を仕掛いたすの手配りをなす扨お話しは聊さか戻りまして三好家の人質和姫初め數多の女中は土佐國高知へ乗込み主元親一同の家來に申附け數多の座敷を出來させ夫へ對して入置きまして朝夕不自由のないやうに充分手當をいたし置きました家來に於ては男女七才にして席を同じうせぬとの古言を守り決して若き者は附けず老人の極直なる人を撰んで附置きまもる位い和姫老女里村と假に名前を改めたる嫁と共にさま〳〵に工夫をいたし元親に近

附かんといたし居りまする是れは元親を討取つて終へは必ら逆國中の騒動にあり左樣いたしたる時は忽ち戦爭を起さんとの ふ兄の計畧でございまそが之ば飽まで粧はひ形を造り今日は上己の節句とて送り寄したる酒肴を取並べ女中を對手に四方山の物語りをいたし琴を彈じなどいたして頻きりに打興じて居りました。

第四十二席

○「申し上げまし老女が　里「何事でありまむか　○「ハイ只今大殿若殿御同道にてお入來にありました　里「ハア左樣でありますか夫れではお出迎へをと直ぐに支度を整へ出迎へをいたしまする元親長男孫太郎盛親、次男彌三郎信親の兩人を左右に從へ其外四五人の近習小性を前後に連れて參り設けの席へ着座いたしました和姫は優やかに手扇を仕いて挨拶をいたしまも

ると此のとき元親　元「是れは和姫殿にてあるか久々面會をいたさんであつたるが相變らず急穩で喜ばしく存ずる　和「恐れながら貴所樣にも何日も御機嫌克しく恐悦に存じまする　元「今日は參りしは餘の儀でなけれど盛親は既に面會をいたせしも次男彌三郎信親未だ面會をいたさぬによつて引連れて參つた信親よ致々噂さいたしたる是れが三好の和姫にてある　彌「ハヽ是れは初めて、面會をいたす拙者は信親と申するもの見知り置かれて別懇に賴む　和「是れはお初にお目通りをいたします妾は和姫と申す不調法ものにございます何卒お見知り置かれ御懇情を願ひまもる今日は宜うこそお出にありましたとひいつゝ頭を上げて見てあれば齢年十八才天のなせる美男其の胸に孫子の兵法を蔵み且つ事を千里の外に知り計畧を帷幕の内に廻らす文武兩道に秀でし英雄一度怒れば鬼をも拉ぐと

いふ是れを稱へて眞の英雄と申しまする和姫は我れにもあらぬ心惚として思はぬも顏に紅葉を散せしが其の内に里村が一里折角にお入來にありましたことゆゑ何はなくとも粗酒一献奉つらんとて肴を改めて酒を侑め四方山の話しの内に元親が　元「如何に和姫承まはれば御身は筑紫琴を宜ういたさるゝとのこと願はくば一曲所望いたしたい　和「恐れ入りましてございます未熟には候へども御所望に應じまして耳を汚し奉つる　元「是れは早速の承知忝じけおう存ずるサヽ早う〳〵と勸められ夫れより和姫手馴しところの筑紫琴を調べしが一曲は高く一曲は低く一聲は長く一聲は短かく五音乱れず律々能く鶴の九皐に鳴くが如く露の梧桐に落つるが如く美聲は宛然染の座をも落さばかり一曲畢つたるときに親子の者は只手を打て感心をおし　元「扨も感能なる者哉只今の一曲を聞いて心精々と致し老人の此方おぞは

月宮殿に遊びし如き心地いたせど悉くとく喜こんで立歸りましたし然る處其後は折に觸れ時に據り元親來つて今日も翠を所望いたし酒宴を催はしては喜こんで戻りまする和姫は人の居るときにこそ主從の如くに見せ掛くれども深夜にでも相成り差向ひに成りしとき抔には里村を差して姉上と呼び又片方を妹と呼ぶなどもございまするが或夜の事二人は差向ひにて　里「扨てお和殿和「ハイ姉上様何でございます　里「外のことではありませぬが追々計畧も成就いたし元親殿親子の此所へ屢々お入來にあるは此の上もなき幸はひ就ては御身は色を以つて元親殿を欺むき一刀てに刺殺し我夫源丞之殿へ早く注進をいたし君の響たる當家を押潰そこと肝要でござる　和「ハイ妾も足はぬおがら其の心得では居りますが何といよても恐の質思ふまゝには成り兼ねまもがは高事は姉上どうか宜しくお計らひを願ひます　里「私しとても充

分には參りませぬが出來得るだけの計らひはいたすの所存でありまする。

第四十三席

里村は形を改めて　里「就ては お和殿和女は妾に對し隱してお在でおさるとがありませう　和「イエ姉上決して妾は何事もお隱し申しはいたしません　里「イヤお隱しおさるに相違ない此の頃樂々として樂しまぬ樣子お察し申する處信親殿に想ひを懸てお在と見えますといはれてハッと顏を赤らめ差向いて　和「イエ左樣あとは決してございません　里「イヤお隱しおさるな信親殿は那の通りの美男と申し心ばへも宜く和女がお心を懸られるは尤ともではありまするが私のため君の大事を忘れ兄源之丞の迷惑になるやうあとを惹出しては誓つて參つた言葉に背きませう煩惱の袢を斷切つて今申したる其の計畧を行なはねばありませぬ

色情のあまりにて計畧手遂ぬになりはせぬかと妾は胸を痛めて居りまもなかといはれて和姫　和「ハイといひしが暫らくは茫然として居たりしが、キッと形を改ためて　和「誠に姉上恐れ入りましてございまもの如く信親殿に對し恥かしながら懸想をいたしてございまも和女の只今仰せられる通り熱々思へばお父上の討死遊ばされしも元親親子の討畧と思はず無明の夢も覺果てました是より心を改ためて仰せに從がい申しまするゆゑ御安心下さいまし　里「オヽ其の言葉を承まはつて安堵いたしました今後元親殿のお入來にありし時妾が首尾をいたすはもに必らず手違ぬのないやうにとヒソ〳〵相談をいたし元親の來るのを待つて居ると六月の上旬降出したる儀雨椽先へ立出でヽ庭を眺めて居る處へ庭傳ひに參りしは供をも連れず一人の武士、ヒューッと音色床しく横笛の調べ柴折の處に立掛り思ふ儘を吹さんで居りまも

僅かの間に雨歇んで雲間を出づる八日の月里村は庭下駄を履き立出でヽ　里「恐れながら何誰でございます　元「オヽお咎めに預かり近頃赤面の致り某がしは元親である　里「オヤお殿様でございまするか如何遊ばしてでございます　元「イヤ餘り徒然の事ゆゑに庭前を徐ろ歩きいたして居る内に只今の驟雨暫時雨を凌がんために立寄りたり　里「左様にてござりまもるか大殿様とあるかれば決して御遠慮はございません、サヽ此方へお這入り遊ばしませと柴折戸を開けば　元「許し玉へと立入りながら　元「未だ姫はお休みなさらぬか　里「左様でございます是にお在で遊ばしまもサヽどうぞ此方へお這入り遊ばせ　元「許し玉へと里村の案内に連れて椽先へ昇りまもる姫は夫へ兩手を仕へ　和「是は〳〵宜うよそお入來にありましたどうぞ此方へと會釈を致し元親は兩人の俏めに從がひ奥の一室へ立入りまして一通りの挨拶畢り早速

に運び出せし酒肴里村に侑められ　元「是は〳〵馳走に預かり忝じけなう存ずると固より大酒のことゆゑ引受け〳〵充分に酩酊元「アヽ大層に酩酊をいたした　里「恐れ入りました未だ御酩酊のやうにも見えません　和「先刻承まはればお美事なる横笛　元「アヽヽヽ近頃面目次第もない俗にいふ下手の横好其の許の琴に　なと比べては雲泥の相違併し如何でござる御迷惑ながら相變らず一曲所望をいたしたい　和「お恥かしうございます　里「ハイ夫が宜しうございます大殿様の横笛がいまして喃里村　元「是は近頃面白い然らば宜きに頼む夫より三と和女のお琴と末熟ながら妾が皷弓と三曲合奏をいたさうでは　ございませんか　元「是は近頃面白い然らば宜きに頼む夫より三人合奏を致たせしが元親も横笛の名譽にして益々興に入りました。

第四十四席

夫れより又た改めて酒宴をいたし　元「アヽ十二分に酩酊をいたした暫時許し給へとてゴロリと夫れへ横たはる　里「恐れおがらふ風邪を召すと悪うございます那方へお出で遊ばして緩りとお休息遊ばしませ　元「イヤ大きに手数を掛けて恐れ入る、扨て御身等へ對し申し入れるは除の義でおい恥かしおがら斯く申する元親是れある處の姫に懸想をいたしたが何と里村其の方執持つて呉れまいか　里「ハイお執持申すまでもなく其のやうなことおれば姫君も定めしお喜こびでございませうといひおがら姫君の顔を見てニッコリと笑ふ姫は恥かしげに　和「アレヤア飛んだお戯むれを仰せられまそ妾のやうなものをといひおがらも顔赤らめて差俯向いて跡は言葉もございません　元「如何に里村其の許は聊さか遠慮いたして貰ひたい元親直々に姫へ對してお話しをいたそ　里「オホヽヽヽ私しが居つてお邪魔とあらば何れへなり

と參るでございませう何は然れ御充分の御酩酊那方へお出で遊ばして御休息遊ばしませ姫上サ御案内を遊ばしておよりにおるまでお話しのお對手を遊ばしませ　和「夫れでも里村妾はお聊しいではおいか　里「エヽ何を仰せられまそ和女も常々御殿樣と度々仰せがあるではございませんか　和「アレマアホンにさういう事を、とイソ〳〵として居りまそを姫の手を取りまた元親の手を取つて奥の一間へ連れ來る内に早くもキツト目配せをいたす知れざるやうに姫に於ても合點をいたそ元親に於ては一間へ這入りましたが如何に英雄でも酒のためには多猥なく剛の聲は雷の如く忽ち熟酔をいたせし樣子次ぎの間にあつたる二人の婦人キツト支度を整へて豫て用意いたしたる懐劍の鞘を拂ひ扨足差足元親の傍らへこそ進み來る、ヤツといふ聲と共に切込んだる劍の下アハヤと見る内元親はヒラリと体を轉じ空を打つたる兩

人は是れはと驚ろき取直さんとしたる小手を一突當てたる手練の挙に思はず落そ懐劍を再たび取らんと近寄るを左右均しく髪ムズと引掴みヒタリ夫れへ引倒し　元「是れは姫が里村と申し合せ我等へ對して強弱を試さんとの必得と見へる武士を夫になさんといふ其の心掛こそ頼母しけれ只今の脱前元親感服いたしてござる兩人何といふべき言葉もなく差俯向いて思はず歯を噛しめ無念を耐へて居りまする元親形を改めて　元「如何に姫只今申そ通り其の許の志思見貫いた上は某がし眞を明し申さんと此の老人何とて御身に懸想を致し階老の契りを結ばんの必得あらん實は嫡男孫太郎盛親未だ定まれる妻もなく和女の如き天晴勇々しきものと嫁合しあば我が家も安泰ならんと存じ其の心根を試したり就ては其の許の心底は如何向卒我が子の嫁となつて賜はらぬや聞くより兩人怒りは表に現はさねども元親の言

葉に思はず、ホッと溜息を吐き里村は進み出でゝ　里「恐れながら妾が足らぬ身を以てお殿様へ對し右様なる失禮を致せし處お怒りもなく却つて御賞美に預かり恐れ入りまする姫様何とて辭みませう實は内々盛親様の奥方にでも相成れば三好の家も安泰と常々仰せはありました何に半無禮をお許し遊ばし宜きにお計らいのほどを願ひます何と左様ではございませぬか姫上　和「ハイ只今里村の申もる通り重々失禮のお詫を申し上げます何卒宜しなにお計らいのほど只管願ひ奉つる。

第四十五席

元「イヤ其のことを承まはつて此の方も大きに祝着の至りに存する何れ三好家へも申し入れ改めて婚姻の式を行ない申さん去りながら只だ今急速に是れを至す譯に相成らんといふは餘の儀にもあらず此度得たる領地の民兒角に國政を非難いたし動をす

れば穏やかならざる擧動をいたす是れによつて我れ兩人の愚息を從がへ彼の地に遙々推參いたし數多の老人を呼び集め發老の興を擧げ民の心を安んじていよ〳〵國政ならば事充分に其の後取行ない申さん夫れまでは御身等も左様存せられて宜しから う　里「ハイさそれば德島へ近々お出張に相成りませか　元「如何にも五月の節句に發老の式を擧ける心得で只今支度最中　里「左様でございますか夫れは御心配のことでございませう　元「イヤ別段に心配でもない今宵は是れにて別れ申さん種々馳走に與かつて添じけふう存ぞる　和「恐れ入りまして、ございいまを差し上げる物もなく失禮をいたしました隨分共に御機嫌克しう　元「アヽコレ〳〵此方忍びにて參りしことゆゑ餘の者に知らせるには及ばん里村案内をいたせ　里「畏こまりました夫れより元親は本城へ引き取りました跡に殘りし兩人は互ひに顔を見合せて　和「

如何に姉上　里「ハイ和姫殿和女も定めし御殘念でございませう　和「如何にも仰せの通り九分九厘までなりし處殘念ながら未熟の妾が腕前にて望みを遂げることならぬ　里「併し定めし怨ることゝ存ぜしに思ひの外ある那の言葉此の後共にキッと心を注けられて　和「左樣でございまする仰せの如く充分いたしたう存じますが就ては姉上樣只今元親のいはれるには五月五日養老の式とやら何に宜い御趣向はございませんか　里「然ればでありますす此の事良夫の方へ申し送ば必らず志慮ある源之丞殿何とか宜い工夫がございませう　和「ホンにさうでございますね、さういたしたが宜しうございませう夫に就ては使ひのものは誰に致したが宜うございませうか　里「されば國に表より召し連れ参りし身分は卑しき下郎あがら正直律義の德藏と申するもの懇々妾が目を掛けて居りまもから那のものに申し附け早速遣はすことにいたそでご

さいませう　和「成程夫れにいたしても常尋のことゝあれは餘の人に疑がひを受けんと存じます　里「萬一殿の疑がひ掛らば御内緣のことをお含みまでに申し送ると言ひ說くやうにいたす心算　和「仰せの通りさう遊ばしたらお宜しうございませうと茲で相談一決あし細々認ためたる書面には此度元親の嫡男孫太郎を以つて云々と緣談の義を一伍一什認ため其の外養老の典のことに就て元親親子德島へ少かの手勢にて出張いたすの赴むき認ためし仮令書面を奪はれても已れ等の計畧手遠ゐにあらざるやうにいたし翌日德藏を呼出しまして金子若干を遣はし里村より内意を含め德藏は直ちに出立をいたしましたが固より秘密の使ひと承たまはり文箱に入れたる手紙を已れか肌に結び附け高知を跡にし一里餘りも參りまもると松並木の間より深編笠にて面体を包みし年若ある武士兩人ハラ〳〵ッと夫のところへ現はれ出で

ました

第四十六席

ズカ〳〵と德藏の側へ進み寄つたる武士二人　武「アヽコレ〳〵待て　德「ハイ何でございまし　武「其の方は何者である　德「エヽ私しは和姫樣のお供をいたして參りました德藏と申す下郎のものにございます　武「何の御用で何れへ參る　德「外のことではございませんが此のたびお國表へ御手紙を待つて參るやう御老女樣から仰せによりまして參りますが御無沙汰をいたしたに依つて御機嫌伺がひの御手紙だそうでございます夫れをお屆け申しに參るので　武「ウム左樣か其の手紙を此の方に少々〳〵見せて呉れるやう　德「エヽ貴郎樣は何誰かは存じませんが此の手紙は決して御覽に入れる譯にはなりません　武「イヤ聊さか見んければならぬ用事があつて其方に申すのだ　德「ヘエ貴郎は全体何といふ

お方でございますか存じませんが此の手紙を御覽になつた處が仕樣がないぢやアございませんか夫れに又怪しいものではなし夫々御役人樣にお屆けをしてお許しを蒙むつて參つた私し故別段に疑がひを受けるやうな譯がございません　武「餘計おことを申すに及ばん此方は見んければならぬ必要があるから見たいと申すのだ　德「ヘエー夫れはマア强て見たいと仰しやれば御覽に入れても宜うございますが遲くなると迷惑でございます行つて歸る日限も極つて居るものでございますから此處で手間暇取つて私しが困ります　武「コレ〳〵其の方に迷惑の掛らんやうにして遣はすから安心いたせ　德「ヘエ左樣でございますか夫れぢやア御覽に入れます然しながらお名前を承はらぬ手紙を御覽に入れるといふは何だか變な氣持がいたします、が貴所樣は何といふお方でございます　武「ウム我々廣人の名前を聞きたいと申

すか　德「ハイ左様でございます　武「俺はナ　德「ヘエ元親の嫡男孫太郎盛親と申そものぢや　德「ヘエー夫れぢやア貴所様は御城主様の若様でございますか　盛「如何にも左様ぢや是れに居れは舍弟信親であるぞ　德「ヘエーどうしてマア御家來もお連れ遊ばさず何でそんなに御詮議遊ばしまも　盛「何で詮議をいたさうと其の方等の知る處でない暫時扣えて居れ　德「ヘエ　盛「サア早く手紙を出さぬか　德「長こまりましたと差出したる文箱、結び目を開き取り出したる書面誠に能く書いてございます、押開いて始め終りを續下すと手跡といひ文章といひ天晴美事、兩人ヒソ〳〵語りながら打眺めて居りましたが　盛「イヤ大きに大儀であつた此方へ參れ其方に褒美を遣らする　德「ヘエー何と仰しやいます何方へお連れにおりますかモシ〳〵私しを此の森の中へ連れて入らつしやいまして何と遊ばす御下働でございますも　盛「其の處へ着座いたせ　德「ヘエー座りますればどうおりませう早くどうか手紙を戻して頂きとう存じまも　盛「コレ其の方に改めて尋ねるみとがある其方は國表より和姫の供いたして參つたものであらうな　德「ヘエ左様でございます　盛「併し首葉の樣子、阿波のものとも思はれん當國の生れのものゝ樣にも思ふがどうぢや　德「左樣でございます實は此の高知の在の小杉村といふ所の百姓の平助と申そものゝ悴でございます性質ての放蕩我儘家には足が留まりませんで流れ〳〵て阿波國へ參りまして御緣があつて御城内に御奉公をいたしましたが扨て情いのは年で今にあつて考へれば兩親に不孝をした廉か誠に面目おく國へ返れば兄弟もあり身寄も澤山ございますから一度故郷へ戻りたくは思ひまも　盛「何日も〳〵斯樣なひがおい身分にて故郷へ返る錦もおくゝどの面下げて戻る事も出來ません。

第四十七席

盛「ウム左様か併し過つて改たむるに憚かることなし、其の方親兄弟に對して不孝不義を働らいた段わ悔後いたせば高知の在へ戻つても恥かしからぬやうに此の方等がいたして遣はそ　徳「ヘエー夫れは有難う存じまそ何の仕出したこともあく左様な有難いお言葉を頂だいて恐れ入りまそセテ又ぞういふ次第で……　盛「然れば聊さか其の方へ願みたい事がある　徳「ヘエー私しのやうなものに對してお願みとは何でございまそかは存しませんが出て來ることならいたします　盛「早速の承知喜こばしく存ぜる左様なれば此方申し附けることを必ら遵背いたそまいな　徳「ヘエ〳〵とんあことでございますか承知いたすと申したからには飛度仕つるでございませう　盛「ウム其の言葉を承まはつて喜こばしく存ぜる改ためて申すがお　徳「ヘエ何でございます　盛「其の方も

此の高知の在方で生れたとあらば當國の領主の繁昌をいたそことは定めし願うことであらうな　徳「左様でございます夫れはウ仰せがおくとも、お上の勢ひが能く五穀成就をいたしまそれば私くしどもを始め連がる民百姓はどんあに嬉しいか知れません　盛「ウム然らば申すが餘の儀ではあい永年の間此の國は上に立つところの領主を始め數多の役人心曲げた人のみ多く民の愛ひを願みず私欲增長をいたせしを我が父元親儘かの身分より起て只今の如き勢ひになり當國を治めしが隣國三好細川の叛逆何卒いたして此のもの等も改心いたさせ民と共に苦樂をなさんと存せしところ三好細川は我意に募り聊さかあることよりして先年取かひをいたし幸はひにして父が勝利を得德島をも領せしが三好の娘和姫とて此方へ寄せし人質少しく不審おきにしもあらず一夫々取調べいたせし處彼等種々ある計畧を行おひ我々又其の

計略の裏をかき民の塗炭を救はんと存ずる就ては其方當國の生れといふことを疾くにも知り使ひに立ちしが幸はひあれば汝を厚く諭さんと此の處に待ち受けたり必らず心得違ゐをいたさず領主のためを計つて呉れよ　德「ヘエ固より私くし共はお上様の遊ばそことは有難いと心得て居りまして決して惡いやうには思いはいたしません併し此の末はどうなることでございまそ　盛「然れば其方の申したばかりでは此の方も案心がある筈る先づ汝の故郷へ對し案内をいたせ是れは當座の褒美ぢやと懐ころより金子五十兩を差出した下郎の德藏呆氣に取られて　德「ナヽナンでございまそ斯んお私くしに御褒美を下さいますとか夫ぢやアモウ田畑を買つて元の百姓になり生涯樂が出來ますけれども此のお使ひの方が遲くなりましては……　盛「イヤ心配は無用である必ら必其の方に迷惑は掛らんやうに計らひ遣はす　德「ヘエ左樣で

ございまそかと是れなる德藏盛親兄弟の差圖に從がひ我が故郷を差して立返つて參り永年の間音沙汰もいたさずしゆゑ覺束なくも參りましたが小杉村の庄屋山田軍右衛門と申すもの方へ參り段々德藏の身の上を調べると同村の百姓平助といふものゝ次男にして先年家出いたしたに相違ないといふことが解りました。

第四十八席

ソコで再たび軍右衛門の奥の一間へ德藏を連參り四邊の人を遠ざけて舍弟信親料紙硯を取寄せられ和姫の手紙を前に差置き是に擬ふて認ためましたが一齣に秀でゐるものは萬齣に通ずるの譬の通り誠とに信親は書を能くいたしまするに依つて惡ごと和姫の手跡に僞せ何れが眞か僞か解らざる位ゐ右の書面を文箱に入れて差出だせば盛親、德藏に向ひ　盛「如何に下郎其の方是へ

ある處の書面一刻も早く申附たる處へ届げるやうにいたせ　徳「ヘエ畏こまりましてございます　盛「されど大切の書面なれば何人が如何樣あるとを尋ねると雖ども決して口外いたしてはならんぞ、イヤサ我々が密談したることを必らず他人にいふてはおらんといふのだ　徳「ハイ〳〵承知いたしました　盛「萬一其の方口外でもいたせば汝の親戚を初め片ッ端より磔刑の刑に行おうから左樣心得ろ　徳「ヘエ　盛「コレ軍右衛門　軍「ハッ　盛「其の方に申附け置いたる是れある德藏の親戚一同を召寄せたか　軍「如何にも一同の御次の間へ召連ましてございます、といひつゝ唐紙を押開けば平助夫婦を初め兄弟二人其の他親戚のもの四五人何れも腰縄を打つてある樣子　德「ヤア夫に居るのは父樣母樣兄さんに弟ぢやアないか　平「イヤ德藏久しく遇なかつた貴樣のやうお不孝の奴でも雨降風聞の其の時には今頃はどうして居るかと

心配をいたして居つたが能くマア無事で居て呉れた　德「今更お目に掛ると面目次等もございません併し此度の御用を勤めて終へば私しは故郷へ歸つてお暇を貰だいて屋つて參り今までの不孝のお詫をして万分の一の御恩報じをすると思つて居た處此處でお目に掛るといふは大きにお恥かしうございます　平「イヤ〳〵決してそんなに恥入るとはあい承まはれば貴樣は御領主樣の御用を仰せ附けられた趣むき何にも知らぬ下郎の其の方へ大切の御用を仰せ附られるといふは此の上もない冥加の事必らず命を捨るやうな場合があつても御領主樣の仰せは背くまいよ　德「ヘエ〳〵どういたしまして、どんあとがあらうとも決して私しは殿樣の仰せに悖るやうなことはいたしません是を聞いて盛親兄弟ニッコと笑ひ　盛「夫を聞いて我々も安堵いたしたれ然らば速やかに參るやうに　德「ヘエ畏こまりましてございますもと是より德藏支度

を遂げ宙を飛ぶが如くに一の宮を差して乗込んで参り前田縫之助の門前をウロ〳〵いたして居りまするとお武士が早くも夫を認め　○「コレ〳〵貴様は最前から御門前を徘徊いたして居るが何者だ　徳「ヘエ私しは高知からお使ひに参つたものでございます　○「ナニ徳永殿方へ参が徳永様のお屋敷は何方でございます　○「高知の何誰から参つた使りしと　徳「ヘエ左様でございます　○「高知の何誰から参つた使ひだ　徳「エヽ夫は少々申上げ悪うございまを極内々で参れといふお言葉でございますから　○「イヤ苦しうない此方は同じ御家老の前田縫之助様の家来だ　徳「ヘエ左様でございますか同じ御家老様なれば仔細もございませんが実は那方に在つしやいます御当家の姫様和姫様のお附御老女里村様から申附けられたものでございます　○「ウム何は然れ此方へ参れ　徳「ヘエ畏こまりました夫より内玄関の處へ通し暫らく夫に扣えさせ置き頂役へ申

入れると重役よりして主人縫之助へ此段申し入れました。

第四十九席

縫之助此の事を承まはり　縫「何はともあれ其奴庭前へ廻せ予が様先に於て目通りを申附けるとソコデ早速使ひの者をば庭前に廻し程なく縫之助自身に夫へ立出でまして　縫「コレ其方は高知より参りし使ひといふが子は当家の主人縫之助である　徳「ヘエ恐れ入りましてございます私しは徳藏と申しまをる使いの者で縫ウム遠路大儀であつた其の方が志ざしで参つた徳永源之丞は当時病氣にて引籠り居れば予が代つて夫ある書状を拝見をいたすであらう苦しうない是れへ差出だせ　徳「ヘエさうでございますか是は徳永様へ差上げろと堅く云ひ附けられたものでございますからお渡し申を暇になりません　縫「コレ〳〵御前へ到して無礼のことを申すな早く其の書面を差出せ　徳「ヘエ左様なれ

ば御覽に入れまをへエ是でございまをと差出したのは二重三重に包んである重箱　縫「暫らく其方にあつて休息をいたして居れと縫之助は已れの座敷へ右の重箱を持うて入り開封をいたして一通り見まをる來る五月五日德嶋に於て元親親子新領民を手懷けんが爲めに養老の會といふのを催はすに就て御充分の御手配りを願ひたい私しの方に於ても直ちに城に火を掛るといふ文面始め終りを篤と見定めニッコリ笑つてさては源之丞の妻妹旨く計り負したるとと見え之る日頃仲惡き處の後永に功名をさせるも殘念已れの手にこの書面の入りたるこう幸はひ君に言上をいたして我れ功名を現はし彼に與を明して呉れんと一人獸頭き使ひの者に手當を申附け休息をいたさせ其の身は直ぐに登城をなし三好修理之助殿へお目通りをいたし一通り御聽を申上げたる上　縫「恐れながらお人佛ひの儀を聞ひ奉つる聊さか秘密を以つて言上いたしたき事のござる　存「ウマ如何なる事であるか其方等遠慮いたせと一同を遠ざけたる時に縫之助席を進め　縫「此の書面を御覽遊ばされたる　存「何事であるかと存保取上げ暫らくの間眺めて居りましたが是れもニッコリ打笑ひ　存「如何に縫之助扨は計畧充分に成就かし時節致來いたしたり　縫「如何にも尊命の如く御當家御開運の時節と相成り候直ちに出兵の御用意あつて然るべくと存ぜる　存「いふにや及ぶ時は得難し失なひ易し細川へも此段申し入れ兩家合体の上にて元親父子を討ち一旦彼が爲めに奪はれたる德島の城を取返し其上彼の土佐一國を此方の所有といたさん　縫「仰せ御尤とも存する其上細川氏異議を稱ふる其の時には御當家の御武勇を以つて彼の家をも押倒し其の虛に乘じて四國を併呑いたし玉ふこそ然るべし　存「イヤ誠に宜ことばしきことである其方如才もあるまいが使ひの者には返書を

與へ手筈致遣はさるやういたせ　縫「委細畏こまりました」と夫より御前を引退らうとそると存保暫らく考へて居りましたが

存「源之丞殿只今病氣と申し引籠り居るが此事彼へも申さんければ相成んお　縫「恐れながら源之丞儀は眞の病氣にあらざるやう承はり候彼一旦は我妻我が妹を敵地に遣はし候と雖ども初めの決心とは只今聊か相違いたせしやうに專ぱら風說仕つる夫に依つて却つて彼には御沙汰あらざるやうに顯ひたう存ずる　存「左樣か然らば其方能くも扱かへ　縫「委細畏まりましたと其儘縫之助御前を退り自邸へ引き取りました。

第五十話

扨終之助は自邸へ戻り早速書面を認ため必らず五日には總攻をいたそに依つて其の方方に於ても隨分油斷なく嚴かひ初まりし

樣子を知らば高知城を扨出し味方の軍勢に打交り當地へ引取るやうにといふ返翰を認め改ためて德藏を呼出し　縫「コレ德藏やら遠路の義大儀に存ぜる　德「恐れ入りましてございいまそ　德是は返書である大切なる所の密書必ずともに他人に見せては相成らんぞ我れ德永と評議の上認ためたるものなるに依つて里村に對して確かに手渡しいたせ　德「宜しうございます委細心得ました私しは德永樣にお目通りをいたさんでも宜しうございまそか　縫「アヽ少しも差支へあい此方成代つて萬事扱かひをいたす是は當座の褒美である改ためて又上より御賞美に相成る　德「恐れ入りましてございます是はどうも多分の賜物下邸身に取りましてお禮の申しやうもございません　縫「行け行けッ　德「ハヽッと黃金一枚を貰ひ受け本人は喜こんで當城を出立いたし日を經て高知へ引返して參りました元親親子城下の出口入口へ腹臣の

ものに申し附け嚴重に手配りをいたして置きましたが下郎は嫌ての約束の如く已れの故郷小杉村庄屋軍右衛門の方へ對して屋つて參りました盛親兄弟日限の極まつたゆゑ早くも夫れへ出張つて居り奥の座敷へ案内をいたしました恐る〳〵徳藏、軍右衛門の跡に附いて參りましたる正面盛親、左りに信親扣へ居ります北の妻を見るより後へ退つて兩手を上き平伏をいたしました盛徳藏苦しうないモソッと是へ進めよといふ言葉に徳ハヽッ恐れ御りました盛道路の處大儀であつたッテ先方の様子は如何に徳ヘエ仰せに從がひまして御城下へ能り越し徳永様のお屋敷を尋ねて居りますると前田縫之助様御門前へ參りました處云々でございますとあり し話しをいたす盛親兄弟席を進め盛ウム左様でありしかイヤ大いに大儀であつた、シテ其の返答は徳ヘエ是にございますと恐る〳〵差出す兩人開對をいたし打眺

めて居りましたが盛ならく此所に扣えて居る徳ヘエ是にてありました二人はヒソ〳〵相議をいたし彌三郎源之丞に餘せたる處の書面を委しく認ため前にも申す通り信親至つて能書でございまして殊に父兄と深く計り和姫や里村或は徳永等の手跡をば能く學んで置きましたものゆゑ何れが僧か偽か分らん位に認ためました是を再たび文箱に入れて徳藏を呼出し盛如何に下郎其の方が此の度の働ら き誠に過分の至りである迫つて褒美を取らせるが是なる書面を其の方里村の方へ密かに届けるやういたせ如才もあるまいが源之丞方に能り越し返書を受取り來れるやうに申せ徳畏てまりました確かにお届け申します盛アヽコレ〳〵其の方加何やうに相尋ねられると雖ども此度のことは決して口外をいたすな勿論他人の知る所にあらざれば萬一の事彼等に知れる折柄には其の方が口外いたしたと看做し其の方の父

や兄を始め親類一同のものを饗宴に行なうぞ　盛「へエ承知致し
てございます　改めて褒美の沙汰に及ぶが是は當座の手當
であると金子拾兩を與へられ　盛「誠に恐れ入りました私し如き
ものが幾分でもお役に立てば有難いと思つて居りまする處斯ば
かりの御褒美に與かりまして何とも御禮の申しやうがございま
せん　盛「イヤ仔細ない早く行け　盛「へエと盛藏は早速に當城を
出立いたし可喰わん顔をして高知へ返り老女里村へ立返りたる
趣きを申し書面を差出しました。

第五十一席

里村大いに喜のび猶國表の樣子を相尋ねると確かに源之丞に渡
したといふから瀬やくに安堵をいたし其夜に至り和姫と諸共に
人おき處に於て書面を開ひて見てゐれば疑ふ方なき良夫の手蹟
兄の筆にて養老の曲を擧げる當日此方よい攻掛るの心得あれば

其時城中へ火を放ち味方の軍勢の中に引移るべしといふ文案で
ございまするから二人は殊の外に喜び父の敵員の敵元親親子
を滅ぼそは此度にありとて其の日の至るを相待つて居りまする
扨お話し變つて此方は繼之助より改めて細川家へ申入れ此度長
曾我部元親親子來る五月五日猶島に於て養老の式を開くに就て
御當家と共に一舉いたし國賊長曾我部親子を誅戮いたし此方
は先般の恥辱を雪ぎ御當家に於ても彼が領地を充分に蹈破り併
して三好細川の領地に組いたしたくと存ずる宜しく御加勢の程
を願ひ奉つるといふ使者の口上細川右馬頭實之老臣堀田主計、安
戸肥後中村權左衛門、大谷民部、細川三左衛門等を招き此事如何に
計らはんと評議をいたしたる處何れも大いに喜び此儘にいた
し置おば終には元親親子の爲めに御當家の領地へまでも手を出
さんと必定三好方より申出でたる口上こそ幸はひ早速御承知

あつて御手配りの義を願ひ奉まつると異口同音に申人れたれば茲に評定一決をいたし委細承知の赴むきを申送りました。扨前にも委く細く申述べたる通り徳島の領分百姓町人は言ふに及ばず四民擧つて徳島城内に招き前代稀なる處の大曲を行なひ萬民腹皷を打つて喜こび勇んで居りまする内に俄く軒提灯を通ね練物等を引出し喜こび勇んで居りまする内に俄かに聞ゆる貝鉦大鼓ドッとばかりに聞の聲を作り押寄せ來りしはいはでも知れたる三好細川の兩勢兵船を浮めたる有樣は宛然水面を蹴すばかり旗々に於ては翻翻と飜へり又た陸の方よりは三好の大將前田縫之助を先陣といたし中山市左衛門二番に進み青山五郎左衛門山田一郎太夫三好存保は後詰といたし整々堂々と押掛つて參りし事ゆゑ人民は上を下へと狼狽をし老たるを助け幼きを背負ひソレ戰爭だ火事だ逃まつて怪我いたするなと

樣めき渡つたる有樣は叫喚大叫喊阿鼻焦熱の苦しみを見るが如く北内徳島城を望んで海陸二手に別れ乘込み來るに城内に於ては鉦まり返つて城門を鎖ぢ音もせざる有樣に樣々と乘込み來り軍勢の中より前田縫之助陣頭に馬を乘出し天地も罅けよと大音を揚げ「好賊元親親子早く是へ出で候らへ新く申する某が」は三好修理之進存保先手の大將前田縫之助に候なり積年の恨み今よを思ひ知らして呉れん潔よく我が鎗先を味はひ候らへ、と傍如無人の一言此時城内より一聲猟烟虚空遙かに打上がると是を合圖として俄かに鉄砲雨霰の如くに打出やば豫て期したる事ゆゑに三好細川の同勢竹束を突立てエイ〳〵聲を上げて押掛つて參りまする有樣は宛然梨の眞の蟻の集りし如く先手の面々既に城内を臨んで乘込んとなしたる節櫓の狭間を押開さ現はれ出たる一人の大將之あん長曾我部方に勇士の聞ある處の久武

織部かり。

第五十二席

櫓の上に立つたる處の久武織部大音に呼はつたるは織如何に三好前田の同勢能ッく承まはれ斯く申する某がしは城主久武織部と申する者に候各々遠路を厭はず是まで寄來り候段御苦勞に存する幸はい城内に備えたる土佐鍛治の鍛へ上げたる鍛の程を御覽に入れるソレ者共射て落せと下知をなしたり心得たりとあつて面々鐵を惜まず散々に射立てたる事あれば矢面に中つて三好細川の雨勢三四十騎枕を列べて討死を遂げたり織之助大いに焦ち采配を取つて敵の前輪を打叩き　織如何に者共殺ての覺悟にては候はをや敵の鍛何程の事やあらん味方の死骸を足溜りといたし城内に一番乘を仕つる此場に至つて引上げんとするは卑怯にて候なり進め〳〵と烈しき下知に心得たりと壯雄の若侍味

方の死骸を飛越え乗越え城門を臨んで進軍に及ぶ然る所細川の先手細川三左衛門是も同じく部下の士卒に下知を傳へて死骸を乗越に追々に城に近附き石崖を傳はり塀に手を掛け既に城内に乗込まんとする際忽ち城内より一度にトッと落したる處の大石大木其の響き百千の雷が頭上より落來つたるが如く夫が爲ゆに手足を刻まれ粉骨微塵に碎け見る〳〵間に七八十人枕を列べて最期を遂げたり是に依つて少しく攻口緩んで見えたる時に城門左右に押開き猛の紋附いたる大旗に金の二匹子の馬印しを立て城主久武織部同じく中内彌左衛門美々しき扮裝をいたし手勢すぐッて五百人面を振らせ前田縫之助の同勢へ討つて入り從横無盡に駆廻り四方八方に渉つての戰かひ前田の手勢夫が爲めに崩れ渡り色めき立つて見えたりけり二陣にあつたる同勢入替り抑取り包んで討取らんとあしたれども久武中内の勢はひ強く

して動もすれば二陣も崩れ渡らんとなすの有様三陣の同勢四陣と共に揉みに揉んで高の知れたる敵の少勢一人も殘さず討取れよと呼はり〳〵攻込んで掛る折しもあれ大將三好存保の扣えて居る後陣を臨んで一度に駆出す處の鉄砲面を向くべきやうもなし是は如何にと見てあるところへ稻穂の丸の紋付いたる大旗を押立て関の壁を作り元親親子三人乘出だし大音聲に呼はりしは元「如何に三好存保汝の此處に攻來たる事は豫て徳永源之丞の注進に依つて我れ〳〵知つたり何ぞや其方等の計畧に陷るべきか浅墓にも我が領地に乘込み來つたるは汝の運の極めあり快よく仁義の及を受けよと元親自身に刀を振り其の左右より盛親信親押取り包んで攻立つて參りましたる様子恩ひも寄らぬ足許より斯る大軍にて攻立てられたる事ゆゑ保存然嚙をいたし存切は豫々計りしと心得居つたるあ斯の如く計畧相違に及びしか組

は殘念あり此所に及んで何ぞ猶豫なそべきかとて必死になつて戰かひをおしたるが先陣は崩れ立直さんとなしたるところ後隨も斯くの如くの有様あれば三好勢惣崩れとなり相成りました。

第五十三回

久武中内は豫ての計畧茲にありとて鉄砲の彈を込替に〳〵撃出し夫が爲めに終に先陣後陣共に惣崩れに相成り奈何とも致し方なく惣敗軍と相成りました夫と同時に船手より進んで參りたる細川の同勢各々上陸をいたしたる時に此の騒ぎを見て右馬頭實之松「扨は三好勢敵の爲めに計畧に陷つたるか早々引上げ候らへとて篠の船を臨んで引返さうとおしたる處思ひも寄らず繋ぎ置いたる船の中より夥だしく鉄砲を打出し一人の大將艦に立上つて

○「如何に細川貴殿の來るを先刻より待つ事此處に久し斯く申そる某がし事は長曾我部の老臣吉良播磨に候あり貴殿が乘

來りし處の船は此方申し受けたり深く討死を遂げ玉へと是亦烈しく鉄砲を擬掛けられ細川の同勢に於ては大きに驚ろき上を下へと騒動をいたしまそる實之此時歯噛をなし右「扨は我れに於ても長曾我部の爲に討たるとか去りながら高の知れたる敵は少勢此處に討死おすも殘念おり早く一方を破り富岡城内へ引揚げんと必死とおつて此處に戰かひを開き一人死を極める時は十人に當り難しといふ比喩の通り譜代恩顧の侍死を極めて戰かひし事ゆゑに流石に勇みし吉良の同勢少しく弱んで見えたる時に

エイサ〳〵と櫓拍子を揃にて二十艘ばかりの親船岸を臨んで乘込み來り九曜の紋の附いたる高張を抑立て

△「如何に大將此所を御引揚げるこそ然るべく存ぜる御迎への爲に推察致し候おりと呼はつた烈しき中に實之は右輪へ馬を乘附け艦に立上つたる大將は何者おんらと能く〳〵御覽に相成ると我が家の老臣細川傳内恐れながら君公斯の如く敵の計畧に陥り思ふは之事を輕畧に遊ばし王ふが故おり某がし富岡城の御留守居仰せ附けられたりと雖も御心許おく存ぜ夫ゆゑ御迎ひに參つたりイザ〳〵御歸城あつて然るべく存ずる某がし守護し奉まつるといふを聞いて實之は聊さか安堵しも敵の計畧に出遇て九死の中に一生を得ると之汝の賜物なり此恩決して忘却は致すまじ傳「恐れおから勿体なき處の詞意イザ〳〵早く船へ召し玉へヤア〳〵方々君の御供をいたし候らへと傳内我が船へ大將を誘なひ入れ其の身は外の船に打乘り味方の勢に下知を傳へ實之を守護いたし富岡城を臨んで引返しまし た吉良播磨は一度攻口を破られしと雖も大將實之落行くを見て遁さじものとと船を以つて追掛け來るを細川傳内大きに怒り 傳汝匹夫大將へ對して見參せんとは無禮おり細川傳内此處に

傳「恐れながら君公斯の如く敵の計略に陥り思ふは之事を輕舉に遊ばし玉ふが故なり某がし富岡城の御留守居仰せ附けられたりと雖ども御心許なく存ぜ夫ゆゑ御迎ひに參つたりイザ御歸城あつて然るべく存ずる某がし守護し奉まつるといふ

右「道は傳内にてあるか我れ脱くを開いて寶之は聊さか安堵し

傳「恐れながら勿体なき處の諚意イザも敵の計略に出遇て九死の中に一生を得ると之汝の賜物なり此恩決して忘却は致すまじ

〈早く船へ召し玉へ、ヤア〉

傳内我が船へ大將を誘ひ入れ其の身は外の船に打乘り味方の勢に下知を傳へ寶之を守護いたし富岡城を臨んで引返しまし た吉良播磨は一度攻口を破られしと雖ども大將寶之落行くを見て遁さじものをと船を以つて追駆け來るそ細川傳内大きに怒り傳「汝匹夫大將へ對して見參せんとは無禮なり細川傳内此處にあ

り其の手の大將來つて我れと尋常の勝負に及べと槍取うて敵を招いたる有樣天晴勇々しく見ゐたりけり吉良播磨船を漕寄せ大聲に呼はり　播「如何に傳内とやら汝先刻よりの働らき敵ながらも天晴感服いたしたり我れは長曾我部の忠臣吉良播磨にて候對手に取つて不足はあるまじィデャ一騎討の勝負に及ばんと槍を取つて突掛る心得たりといひながら傳内之に當り上段下段と渡り合しが船中あがらも進退の撫引宛然平地にあるが如く暫らくの間といふものは勝負も見にざりしが傳内焦つて　傳「如何に播磨打物業は面倒あり寄せよ組まんと呼はつたり。

第五十四回

播「心得て候なりと得物を夫へ投出し近附くまゝに傳内が播磨の船に飛乘つてムズとばかりに引組んで力足を踏鳴し、エィヤ〳〵と暫らくの間押合つて居りしが双方共に眞逆樣に水中へ落入つ

たる稍あつて刀を咬え左りの手に首を引提げ水面に浮み上がり身震ひなして船中く飛入つたるを敵も味方も見てあれば是なん吉良播磨守大聲を揚げたる事にして　播「細川の勇士細川傳内を吉良播磨守討取つたりと呼はる聲を聞くより長曾我部勢益々勇氣加はりしが鼠却つて猫を噛むといふ譬の通り愈よ必死に相成りまする恐ろしいもので絶体絶命の場合に臨みましたるが細川勢死を極めて勇戰をいたしたるが爲に流石勇み立つたる長曾我部勢も聊か攻口を弛んで見えました其の内に細川勢辛うして危うきを遁れ富岡城へ引返して參りましたが過半は討死を逐げ殘る人々も重傷輕傷を被むつて居る者澤山又三好の同勢に於ても漸やく危うきを遁れて一の宮城中へ引取りました元親親子は味方の同勢を撿ため見るに討死も存外少おく全たく大勝利を得たるに依つて此度功名をいたせし人々は夫々恩賞を遣は